

文化祭で「慰安婦」問題を学び、教室に 「慰安所」を再現した生徒たち 侵略の学習にみる平和教育の難しさ

大阪府 千代田高校教諭
谷山 全

Ⅰ 千代田高校の概要

千代田高校は、大阪府と和歌山県の県境、河内長野市にある学園で、短大と幼稚園が併設されている。前回の急減期に一度つぶれかけ、その時に組合が中心となり、「教育づくり」を軸に学園を民主化して存続させてきた。組合の組織率は、教員 100%、事務職員約 80%。2000 年に創立 50 周年記念として『青春がはじける学園』を刊行した。2002 年から「30 人に限りなく近い学級」を実施している。

生徒達は、差別選別の教育の中で傷つき、複雑な思いを背負って入学してくるものが多い。

	普通科		国際文化科 (共学)	計
	総合コース (女子)	文理コース (共学)		
1 年	3 クラス	4 クラス	1 クラス	2 4 9 人
2 年	3 クラス	4 クラス	2 クラス	2 3 1 人
3 年	3 クラス	5 クラス	2 クラス	2 7 1 人

計 7 5 1 人

Ⅱ 千代田の文化祭は「学ぶ文化祭」(10 月最初の土日)

千代田高校の文化祭は「学ぶ文化祭」という伝統的がある。生徒会が実

行委員会を作り、クラスごとに平和、環境、福祉、演劇などテーマを決めて展示や発表をする。今どきこんな生真面目な文化祭が続けている。当然、たこ焼きやお化け屋敷のない文化祭への生徒達の抵抗は大きく、文化祭＝出店というイメージしか持たない生徒からは「何なん、この文化祭・・・おもんない！」という反発もしばしば返ってくる。しかし、1年、2年、3年とこの文化祭を取り組んでいく中で、今世界で起こっている現在進行形の課題をみんなで考えていく文化祭の「ねうち」を理解し、受験や点数のためではない「学ぶことの本当の目的」に気付いていくものも少なくない。私達教師にとってもこの文化祭は、まだ導き出されていない人類的な課題に対する答えを、生徒とともにともに考えていける貴重な機会であり、「社会とつながる」ことで大きく成長する生徒の姿に希望を与えられ自らの生徒観、教育観を振り返ることができる機会でもある。

この学ぶ文化祭の取り組みは、資料をまとめて自分の意見・感想を書く「文化祭ノート」を使ってすすめていく。

③はじめに 平和教育をすすめていく難しさ、今感じていること

(1)「平和」を学んできていない生徒が年々増えている

- ・ヒロシマ・ナガサキに行ったことのない生徒の多さ。
- 「はだしのゲン」がやたら新鮮。

かつての「平和アレルギー - 」「平和学習はもううんざり」は死語になりつつある。

- ・教科書に書かれない戦争・平和
- 検定に向けた教科書会社の自主規制。

(2)「平和学習」に対するマイナスイメージ

- ・平和というと、酷い写真、悲しい話、そして感想
- ・教師の思い入れの先行

「これが戦争の事実だ。目を背けてはならない」

結局、正統主義に 「戦争あかん」「平和が大事」「平和をまもらないといけない」

(3)学力が不十分な生徒、共感能力の欠如した生徒達が増えている

- ・平和教育はきちんとした事実に基づいてというのが
基礎的な学力がなさすぎる

形のないもの、経験していないものを理解できない 支配、植
民地、経済・・・

- ・人の心の痛みがわかることは平和教育の土台のはずが想像力、共
感能力、正義感・・・の欠如

(4) 「平和学習」と生徒達が生活している教室空間とのギャップ

- ・競争、管理主義、教師の体罰、いじめ・・・暴力的な関係が支配する
中での平和教育、その中で取り組む平和教育とのギャップ

「私は中学の時、はっきり言ってイジメられていました。授業中にのりを頭にぶつけられたり、チョークの粉をイスにまかれたり、先生は見て見ぬふり、注意すらしない先生に私はものすごく腹が立った。私はこの時、親にイジメられているということができなかった。学校なんて楽しくない。学校なんて何で行かなくちゃならないんだ・・・そんなことしか考えられなくなっていきました。そして、ふと思ったのは「自分は何のために生きているんだろう」だった。毎日突き飛ばされたり悪口を言われたり。ある日、友達が私と距離を置きたいと言ってきた。理由は私という自分も一緒にイジメられるから。突然暗闇に放り込まれた気分だった。たった一人の友達も無くしてしまって、本当に一人ぼっちになった気がした。さみしくて悲しくて、何もする気にならなかった。中学の時は「友達なんていない。イジメさえがなければそれでいい。一人ぼっちでいいからイジメないで」って毎日思ってた。」

(5) 社会の右傾化が激しく進む中で

- ・強まる「平和教育」＝「偏っている」という風潮 自主規制

政府が公式に認め、謝罪してることを「配慮」しながら扱わなければならない現状 右傾化の中で保護者に気を使いながらすすめるなければならない。

④ 平和教育の中で大切にしたいこと

(1) 教育の営みそのものが平和教育である

直接戦争や平和の問題を学ぶことだけが平和教育ではない。騙されない学力をつけること、自分の意見を創造し表現できる力をつけること、人のこころの痛みがわかり他者に共感できる力をつけること、個性の違う他者と協力し一つのものを創りあげていく力をつけること・・・いわば教育の営みそのものが平和教育である。その点から言えば、しっかりした学力をつけていくことが、千代田高校の生徒達を前にして、なによりもまず私達が向き合っていかなければならない課題であると思う。

(2)事実をしっかり学び「借り物でない自分の言葉」で平和を語れるように

まず事実をしっかり学ぶことが平和学習の基本だと思う。しかし平和の知識を増やすことが目的でなく、学んだことを生かし「借り物ではない自分の言葉で平和を語る力」をつけ、社会と積極的にかかわり、働きかけていく力を育てていくことが大切だと思う(たとえ稚拙であっても)。

(3)平和学習を通して「学習観の転換」を

平和学習には、今の学校教育の授業のカリキュラムの中では追求することが難しい「学習観の転換」につながる学びが含まれている。平和学習を通して「学習観の転換」に迫ることができるのではないだろうか。「知らなければならない大切なことがたくさんある」ことに気付き、平和学習を通して、受験やテストのためではない「学ぶことの本来の意味やめあて」を発見させていきたい。人と比べるためにあるのではない学びや、自らの生き方への問いかけのある学習、疑問を大切にする学習、みんなで意見を出し合って考えていくような学習をうんと追求していきたいと思う。

(4)平和学習の中で社会とつながる

青年期にある生徒達にとって、「社会とつながる」ことは自分を変える大きなきっかけとなる。「社会とつながる学びを」は千代田の教育の大きな柱である。平和学習を通して、生徒達に今の社会の矛盾に気づいて行ってほしいと思う。そして政治を見る目を養って欲しいと思う。この春卒業した裕美は、2年生の時に沖縄について学んだ文化祭で、米軍への「思いやり」予算のことを知り、「私の家が貧乏なのは今の政治に問題があるんじゃないか」と初めて自分の生活と政治がつながり、その後大きく変化していった。

(5)「高校生も平和のために何かができる」

平和学習では、いろいろな人の生き方に触れる機会が多い。その人の人生から滲み出たメッセージや若者への期待をしっかりと受け止め、生徒達に「生き方」を考えていってほしいと思う。そして、学んで終わりではなく、大人の「運動」とは違うスタンスで、柔軟な頭で瑞々しい感性や創造性を生かした高校生らしい平和の取り組みをしていき、「市民」として成長していってほしいほしいと思う。実際に社会に働きかける中で「高校生も平和のために何かができる」という確信をもっていってほしい。

(6)平和教育の今日的課題：子どもが生活している空間に、子どもが「大切にされている」と安心し希望を持って平和を学べる土台を

今、生徒達は、競争やイジメ、教師の体罰や管理主義など、「自分が大切にされている」と実感できない空間の中で生活している。そんな中で、いくら声高に「平和」を叫んでみても、子ども達にとっては、虚しく響くことにならないだろうか。体罰がはびこる学校で教師が熱く語る「平和」のうさんくささを、生徒は敏感に感じ取っているように思う。平和教育の今日的課題として、子ども達の日常の生活の場である学校・教室を「自分が大切にされている」と実感でき、安心して過ごすことができる空間に変えていくことが同時に求められているように思う。すなわち、学校・教室から暴力的なものをなくし、一人一人が安心して過ごすことができる空間にしていくこと、クラスの中に温かい人間関係を築き、安心して自分を出すことができる空間にしていくこと、一人一人のこころの中に自己肯定感と人間への信頼を育んでいくこと・・・これらのことが同時に求められていると思う。

千代田高校に入学してくる生徒の多くは、9年間の義務教育の中で「勉強」を通して深く傷つき、自信を失い、根深い学校不信、人間不信を背負っている。そんな生徒達に求められていることは、勉強がわかる喜びを一つでも多くつくっていくこと、勉強を通して自信と自分への肯定感、生きていく希望を回復させていくこと、競争のためだけではない本当の勉強に出会うことで学ぶ目あてを発見させていく営みであろう。それは学力の回復の課題とともに、千代田の生徒達の現状から出発した平和教育の課題といえると思う。

5 「日本の侵略」という重いテーマに……

文化祭の重いテーマは担任からの提案で決まった。直接のきっかけは、1学期に現代社会の授業で「従軍慰安婦」のビデオを見せた時、私が受け持っている3クラスの中で、1組がどのクラスよりもビデオを真剣に見ていて、「ギャル」の生徒達も含めて反応がピンピンと返ってきたことにある。「侵略」の事実が消されようとしている中で、過去の「侵略」の事実だけでなく、今も続く戦後補償の問題、「在日」問題をしっかり学んでいって欲しい。そんな思いをもって提案すると、生徒達は意外とすんなり「まあそのテーマでいいで…」と決まった。そこには「谷山のクラスなら平和になるやろ…」という「覚悟」がすでにできていたことが大きかったのであろうが、他方で、この3年間の間に生徒の中に間違いなく政治や社会への関心が育ってきているということがあると思う。取り組みの過程では、もしかしたらクラスに「在日」の生徒がいるのではないかということを常に念頭において取り組んでいった。

<私の担任したクラスで取り組んできたテーマ>

1年「不況、高い授業料、私達の願いー小泉さん、太田さん私達の願いを聞いて下さい」

2年「命どう宝 沖縄からの平和のメッセージ」

3年「私達は決して忘れない日本の侵略という消えない過去を」(今年)

6 3年1組 クラスの状況

3年1組は学力的、経済的に一番大変な普通科総合コースで、34人の女子クラスである。ギャル系の生徒が1/3近くを占め、感動も反発もストレートに返ってくるようなクラスであった。他方クラスの役員は、何人かを除き力のない生徒が多く、この「生真面目な文化祭」に取り組んでいくのは容易なことではなかった。

文化祭実行委員はY子とM子

2人とも2年生からの持ち上がりである。資料を読んで自分でまとめていくことができる力のある生徒である。2人とも2年の文化祭でやった沖縄の基地問題で視野を大きく広げ、今の政治に対する怒りや疑問を持ち始めるようになっていた。しかし、夏休みの始め、文化祭の出発時点ではこんな状態であった。

M子 感受性豊か。公立高校を落ちて入学してきた生徒で、力があるが、

2年の途中までは千代田高校がイヤでしょうがなかった。差別選別の学習観、学校観に捉われ、自分が「バカな」千代田高校に通っていることが耐えられなかった。しかし2年の時に文化祭の学習に出会い、受験のための勉強ではない、こんな大切な勉強ができる千代田高校のよさに気づき、劇的に変化した。しかし、夏休みのはじめの頃は受験(英米語)のことが気になり文化祭に力が入らなかった。侵略の問題については「侵略のことと言ってもあまりピンとこなかった。私はこういう昔の話がずっとは嫌いだったし、戦争がどうだとか、昔はこうだったとか言われても、私は今生きているし、別にどうでもいいって思っていたから」と言っていた。文化祭を通して、「“知る事の大切さ”と“知らない事の恐ろしさ”」を考えるようになっていった。

Y子 慎重な性格で丁寧、努力家。自分が前に立つのは苦手だが、じっくり考えて行動でき、いろんな子に対する見方が温かく親切なのでまわりから信頼されている。学習観の転換という意味で、「学ぶ」ことの意味を一番よくつかんでいる。テーマについては、「沖縄のことをもう一度やりたい。『従軍慰安婦』問題は一年生の時ちょっとやったし、惨いからあまり乗り気じゃない」と言っていた。文化祭の中で、運動に取り組むたくさんの大人に出会い、自分の行き方を問うようになっていった。

その他の役員

A子 行動的な生徒。朝鮮学校との交流をきっかけにして文化祭へのかかわり方が大きく変化した。垂衣の「やろっ!」という言葉に何度救われたことか。「慰安婦」マップの作成も「慰安所」の再現も、垂衣の「面白そう~やろっ!」がなければできなかったかもしれない。

M 感覚が鋭いが不登校気味。家が「朝鮮嫌い」。朝鮮学校との交流から変化。文化祭の準備では遅くまで残りみんなとよく頑張った。

T子 とても大人しくて真面目。課題など本当にきちんとやってくるが人前でなかなかしゃべれない。

U子 行動的でフィールドワークや作業は大好き。しかし地道に学べない。

Y U子・A S子・M子 3人でかたまって自分達の世界をつくり、クラスにあまり友達関係を広げることができない。真面目だが委員会活動はお仕事の感覚。

7 文化祭までの流れと取り組み 文化祭は10月2日(土)・3日(日)

<文化祭までの流れ>

	役員 + 有志 (10名前後)	クラス全体
夏休み	<ul style="list-style-type: none"> ・登校して学習会をしたりフィールドワークに行ったりする。学習会は机を円にして約2時間。夏休みは計7回の学習会をもった。まず報告者が資料の内容を報告。その後、各自文化祭ノートに準備してきた資料の感想を発表する。 ・資料を読んでわからなかった部分や感想を発表しれ意見が違っていたところをみんなで考える。わからに用語などが出れば、担当を決めて次までに調べてくる。 ・資料は担当がほとんど準備した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料を各自で文化祭ノートにまとめ、感想を書く。役員でない一般の生徒は夏休みあまり登校しないので、講習や登校日に文化祭ノートを提出させて担任が見る
9月 1～3週 9月第2週から文化祭まで45分授業。ホームルームは週回にふえる	<ul style="list-style-type: none"> ・週2回(月曜日と金曜日)放課後に学習会をする。 ・その他の日にフィールドワークや人を招いて話を聞いたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・週2回のホームルームを活用してビデオを見たり、資料を読んで、意見・感想を文化祭ノートに書く
9月 4週	<ul style="list-style-type: none"> ・放課後毎日残って、3ヶ月間学んできた内容を模造紙で展示できるように、まとめて下書きをする。 ・「慰安婦」マップなどの展示物も作成する 	<ul style="list-style-type: none"> ・同上 ・放課後残れる人は残って、役員に協力して作業をする
文化祭2日前 (授業なしで準備)	<ul style="list-style-type: none"> ・クラス全員で準備する。その作業の中心となってみんなに指示をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・クラス全員で準備する(模造紙の清書、部屋の中の装飾、窓の装飾、パンフレットとじ)

<学習内容>

1 学期終業式 テーマを決定し、学習資料を配布(「従軍慰安婦」にされた少女達)

夏休み

クラス役員 5 ～ 8 名が夏休みに登校し、教室で約 2 時間の学習会を 7 回した。

<学んだ内容>

【1】従軍慰安婦(性奴隷)にされた少女達

- ・「従軍慰安婦」とは何か 慰安所での生活
- ・何のためにつくられたのか
- ・日本の敗戦の時「慰安婦」は
- ・初めて実名で証言した金学順さん
- ・日本政府の立場
- ・ビデオ活用 など

【2】「従軍慰安婦」を認めない考え

- ・大臣、政治家の発言
- ・漫画家 K 氏らの意見
- ・「従軍慰安婦」の記述が消える教科書

内容が大きくカットされた NHK 「従軍慰安婦」特集など。

フルドワークに行ったり、いろんな人の話を聞いたりした。

コリアタウンフィールドワーク (8/6 クラス役員 7 人)

生野区猪飼野 リョゴリの店「クムガン」を経営する B さん
夫妻の話

長野高校生平和ゼミナール顧問 宮下与兵衛先生の話

松代大本営の保存運動に取り組む高校生の話(8/23 教室で役員 6 人で聞く)

中田郁江さん、西村千津さんの話を聞きに行く (7 月末 U 子・Y U 子)

中田郁江さん 奈良で「従軍慰安婦」の CD を作る活動

西村千津さん 京都でオリーブの会をつくり「慰安婦」
問題に取り組む。

VAWW-NET(ヴァウネット)ジャパン 西野瑠美子さんの公演(8/17)

立命館国際平和ミュージアムで

役員の学習会について

それぞれが文化祭ノートに資料をまとめ、感想の柱にそって感想を書いて準備してくる(しっかり考えた感想は、“よいノート”と評価して励ましていく)そして決めている報告者が、内容を報告し、わからないことがらなどを出し合う。それでもわからなければ調べる担当者を決めて、その人が次の学習会で報告する。

次に準備してきたお互いの感想を発表しあい、それを文化祭ノートにメモしていく。意見が違うところなどをみんなで考える。

例えば、こんな疑問が出てくる。

「どうして中国であんなにひどい日本へのブーイングが起るの？」

「慰安婦の人達は慰安所で生まれた自分の子どもをかわいいと思えたのかなあ？」

「孫選手は、優賞したこ時、嬉しくなかったんやろうか？」

「自由の身になったのに祖国に帰らなかった朝鮮人がたくさんいたのは何でなん？」

9月 1～3週

役員は放課後週2回の学習会。クラスは、週2回のHR(通常は週1回)で資料を読んだりビデオを見たりする。

【3】日本は戦争の加害者だったー日本は朝鮮で何をしたかー

- ・日本の朝鮮支配
- ・皇民化政策、創氏改名、強制連行 など

【4】金メダルのマラソンランナー 孫基禎選手から消えた「日の丸」

- ・「日の丸」をつけた朝鮮の金メダリスト
- ・ビデオ「知ってるつもり」

【5】関東大震災と朝鮮人虐殺 大川常吉

- ・関東大震災での朝鮮人の大虐殺 6000人
- ・朝鮮人を救った日本人 大川常吉さん
- ・ビデオ「報道ステーションの特集」

【6】在日韓国・朝鮮人問題

- ・日本で迎えた解放
- ・祖国に帰れなかった60万人 一番多い外国人

・在日韓国・朝鮮人、朝鮮学校への差別待遇

【7】高校生の取り組みに学ぼう

- ・朝鮮人強制連行を掘り起こした倉敷中央の高校生
- ・高校松代大本営を保存した篠ノ井旭の高校生

フィールドワークやいろんな人の話

大阪朝鮮高級学校との交流 (9/18 土曜午後 役員+有志 9人が参加)

「強制連行」の裁判に取り組む弁護士 小林保夫さんの話

(9/11 放課後の役員学習会でクラス役員で聞く)

中田郁江さん、西村千津さんのお話 (9/24のHRの時間にクラス全員で聞く)

朝鮮料理の調理実習 (9/29 クラス全員で楽しく調理自習)

在日朝鮮人のリャン=ジュンエさん

9月 4週目

展示の準備に入る。役員は放課後毎日残って、3ヶ月学んできた内容を模造紙で展示できるように、まとめ、下書きをする。「慰安婦」マップなどの展示物も作成する。

8 「侵略」の問題を学ぶ過程で、今回大切にしたこと

【1】侵略の学習の「苦しさ」とどう向き合うかという問題

学ぶことが苦しそうな生徒達

「従軍慰安婦」について学び始めた夏休み、生徒達は日本の加害の事実に変更をヨックを受けていた。「資料読んでいくのしんどいわー」「同じ侵略のことでも『慰安婦』のことはきつい(性の問題だから)」……と役員はつぶやき、文化祭ノートに感想を書くのが重そうだった。

「沖縄」「原爆」の学習との違いを感じる

「侵略」の問題を学ぶとき、生徒の反応をみていて「沖縄」や「原爆」と学習と違うなと感じることがある。それは、怒りや責任のベクトルの向かい方である。「侵略」の問題では、真剣に学べば学ぶほど、その責任が過去の自分の国に、現在の自分の国の政府に、そして国民である自

分自身に突きつけられる。自らの問題として問われてくる。文化祭実行委員の真季は「日本の過去、加害の事実を知っていくことは、容易なことではありませんでした。感情的な私は『慰安婦』問題を知り本当に腹が立って気持ちを抑えるのが困難だった事も幾度とありました。『自分の国が・・・』とショックで気持ちが重くなって知ることを拒みそうになった事もありました」と語っている。この「苦しい学習」を乗り越えさせていくにはどうしたらいいのか、私は悩んだ。

侵略に抵抗した人々、今この問題と向き合い頑張っている大人の存在

侵略の酷い事実だけでなく、侵略に抵抗した朝鮮や日本の民衆の存在を学ぶ。当時の状況下でも民衆のレベルでの友好が存在したことを学ぶ。そして、今、この問題と真摯に向きあい頑張っている大人達が沢山いることを学ぶ。生身の人間の姿が見える資料を準備してこのような視点を大切にしたいと思った。ここに生徒達は、希望を見つけ、自らの生き方を問うはずだ。

【2】生徒の中にある強烈な政治不信の下でどう学ぶのかという問題

国会議員の年金未納問題が生徒にもたらしたもの

文化祭に取り組み始めた7月頃。国会議員の年金未納問題が起こっていた。もともとある政治に対する不信感の上に、未納問題が拍車をかけ、生徒の政治不信を増大させていた。亜衣は「誰がやっても一緒。政治家はみんな汚いやろ」と言い、N子は「私は選挙になんか行かない。だって自分が入れた人に騙されるのが一番悔しいから……。20歳になっても絶対選挙に行かない」と言っていた。

民衆の運動と社会の発展に確信を持てるように

多くの生徒が、今の世の中に希望をもつことができないでいる。そしてそれを変えるための政治というものに全く期待していない。私は学習を通して、生徒達に「社会が人々の運動の中で発展してきた」ことに確信を持って欲しいと思った。国民の働きかけによって政治が動かされてきた事実を知って欲しいと思った。この学習を生徒達の歴史観・社会認識を変え、生き方を変えるきっかけにしたかった。そのために、侵略の問題と誠実に向き合い頑張っている大人・市民の存在とその運動をたくさん学びたいと思った。

9 生徒はどう受け止めたか

【1】「慰安婦」問題を学んで

特徴的な意見・感想

- ・日本軍「慰安婦」の事実を詳しく知り、生徒がショックを受けた生徒が多かった。
- ・とりわけ、日本軍「慰安婦」の目的＝日本軍が占領地で繰り広げるレイプによって日本軍の中に性病が広がることによる軍の戦力低下を防ぐために「慰安婦」制度が設けられたことに大きな怒りを持った。
- ・目をそむけたくなるような日本の過去の事実多くの生徒が「苦しい思い」を持った。
 - ・初めて実名で証言した金学順さんのことを取り上げてよかった。生徒達は金学順さんの思い、願い、生きる姿から多くのこと感じた。
- ・このような事実を知ることができてよかったという生徒が沢山いた。
- ・もっといろんなことを知りたいという生徒も出て来た

私も日本だけが被害にあったかわいそうな国だと思っていました。もし金学順さんが証言してくれなかったら「従軍慰安婦」のことを知ることができなかったと思います。私は「慰安婦」にとっても興味を持ったので友達にこの話をしています。でもみんなからは「知らなかった!」という返事が返ってきます。もっとももっといろんな人が知れば私みたいに共感してくれる人が出てくるのに……と思います。知ることが大切だと思うんです。知らないってことが最悪なことだと思います。自分の国なのに、これまで日本の悪いところは隠して日本のかわいそうなことだけ知れされてきて……私は悲しく思います。今まで何年も生きてきて、歴史の勉強もしてきたけど、そんな話はほとんど出てきませんでした。そう考えるとこの他にもまだまだ日本がしてきた知らないことがたくさんあるんじゃないかって考えてしまいます。だからもっとももっといろんなことを知っていきたい! 「慰安婦」のこともそうだけでもっと違うことも……。こういうことを私達が学んで共感していけば金学順さんたちも少しは報われるんじゃないかな。今回、大切なことを知れて本当によかった!! 感謝しています。(Y K子)

「従軍慰安婦」にされた人達は、もう80歳ぐらいになっていて、何十年もの間、ずっと絶えることなく苦しみ続けてたんやろうなって思ったら、胸が痛くなる。死んでいった人は、最後まで誰にも言えず一人で死んでいったのかなー。この世に未練ありまくりやと思う。私なら日本人を呪うくらいの勢いです! 10万人以上の人の人生を日本がこわしたてしまったんやって思ったらすごく悔しい。金学順さんの手紙の中身はすごくわかった。私だって

この勉強をする前までは、全く「慰安婦」のことを知らなかったし、日本はずっと戦争の被害者やと思ったままやったから。だから、このことを学べてよかった。本当のことがわかって、イヤやけどよかった。(E子)

実際にやっていたのに「日本政府は関係ない」とか、何で言えるんやろう。実名で公表した金学順さんが可愛そうすぎる！金さんは本間にすごいと思った。日本の国を相手に裁判を起こすなんてすごい勇気やと思った。私は「慰安婦」の人達に勝ってもらいたい！日本政府はやったことをしっかり認めてちゃんと謝ってほしいと思う。同じ日本人として私はそう思う！過去のことは消されへんと思うけど、ちょっとでも「慰安婦」にされた人達の過去がうまるならいいことだと思う。「慰安婦」として扱われた人達のことを、私達はもっともっと知らなあかんと思う。日本にとってこの出来事は大きいことだから、忘れていったらあかんと思う。日本は戦争の被害者っていうけど、それだけじゃないんだって考えさせられた。(YK)

はじめて「従軍慰安婦」のところを勉強し始めた時、私は何も知らなかった。特に興味も湧かなかった。でも「慰安婦」のことを勉強していく中でびっくりしたことやショックを受けたことがたくさんあった。今の私たちからは信じられない出来事ばかりで、そんな中で私はもっと「慰安婦」について知りたいと思い、考えていきたいと思うようになった。こうして私達が「慰安婦」のことを学べるのは、声をあげて真実を公表した女性達がいたからだと思う。今までの私の考えの中では、日本は被害をいっぱい受けた国、広島・長崎・沖縄などの戦争で悲劇を受けた国って思っていて、昔日本が朝鮮にこんなひどいことをしたことなど知らなかった。その分ショック多かったけど、私は私達がこういうことを知らない、何か日本だけ孤立した国になっていったらダメになると思う(AM)

【2】侵略を認めない大臣、政治家の発言を知って

特徴的な意見・感想

- ・「本当にこんなことを考えているのか」と生徒は信じられない様子だった。
- ・他国を引き合いに出したてごまかしたり、自国中心に物事を考え、事実を正面から受け止めようとしない政治家の姿勢に、金学順さんの思い重ねた生徒達は、怒ったり、あきれたり、鋭い疑問を投げかけたりした。
- ・漫画家Kの意見については、女性蔑視の考え方からくる「慰安婦」肯定論に嫌悪感を持ったものが多かった。

私は日本が今までにこんな発言をしていたなんて知らなくて、知らなかつ

たのも恥ずかしいと思ったけど、それ以上に、日本の代表的な存在の人が、こういう言葉を繰り返していたということに恥集心を感じました。他国も同じことをやっていた、という言い訳がましい発言があったけど、実際、強制連行し、大量に未成年の少女たちを「慰安婦」にさせたのは、日本だけだったと言います。もし、他国も日本と同じことをしていたとしても、日本は何も言う資格なんてないはず。日本は日本だと思います。まず、自分の国が何をしたいのかをしっかりと受け止めていかなければならないと、私は思っています。日本の代表である人々がそういう発言をすることで、日本全体が悪く思われるのは嫌です

T S 衆議院議員にはあきれてしまいました。「自分がやったんじゃないから反省なんかしない」とか言う人が何で政治家になってるんや??って思いました。確かに、自分には関係のない昔の出来事だという意見は、わからなくはありません。私も、ずっとそう思ってたから。でも、私は日本がやってきたことを知ったとき、なんか、すごく悲しかった。自分の国が…?みたいな。何かスゴクショックを受けた。この人はそうは思わなかったのかなあ。この人は冷たい。「反省なんかしてませんし…」って、はっきりと言ったけど、今の私たちにできることは、加害国として、やるべきことって考えていく必要があるように思います。

S N 大臣の「従軍慰安婦は売春業者がやったこと。その業者も殆どが韓国や中国の人」という意見は最低だなんて思う。日本が侵略戦争をしてたくさんの人を傷つけたのに、その国の人たちを悪者にして、自分の国を守ろうとしてるみたいだ。

「アメリカもイギリスも売春婦を置いてたから」とか言ってるのは、ちっちゃい子みたいやなあって思った。今は自分の国のことが問題になっているのに、他の国もやってたとか言って問題の中心をずらしてしまってると思う。

O 元衆議院議員って人は「私たちは植民地支配した覚えはない」と言ってるけど、この人がいいことだと思ってやってたといっても、朝鮮や台湾の人にとっては絶対いいことじゃなかったのに、言い訳にもなってないって思った。この人は子どもの頃の教育が抜けきらないから、どれだけ朝鮮の人が訴えてても、信じることができないのなあって思った。

漫画家 Kさんの言う事は、私には理解出来ません。「認められる売春婦はいるのだ」という言葉に驚かされました。「認められる?!」いったい誰が認めるんだ!女性たちは無理矢理連れて行かれて男たちの相手をさせられたのに、そんなの認められるわけがないです。

「日本兵は祖国のために命をかけて戦っていた人達だ。祖国のために戦った男たちの性欲を許せ」というけれど、他の国々を侵略しに行ったのにそれ

が何で祖国のためなんだ。何か言葉をいい方に持って行って言い逃れをしているみたいに感じられる。次の日、死ぬかもしれないかったら、強姦でも、何でもしていいと言うの？私は絶対許せません。

今まで勉強してきて元「慰安婦」の人たちの気持ちが、私なりにすごく伝わってきた。だから小林さんの意見には賛成できない。小林さんは「慰安婦」の人たちの過去をきちんと学んで書いたんだろうか。「『慰安婦』は戦場でのレイプを減らす大切な役割を果たした」とか言ってるけど、「慰安婦」の人たちがされたことはレイプじゃないのか！

【3】大阪朝鮮高級学校(東大阪)と交流して 9月18日(土)

交流会をすることへの不安

朝鮮学校とはこれまで2度ほど交流したことがある。しかし、今回は「拉致問題」があり、北朝鮮バッシング、朝鮮総連バッシングがある中の交流である。すべての教室にキム＝イルソンとキム＝ジョンイルの肖像画が飾ってある中で、いったいどんな交流会になるのか……。不安があり、事前に朝鮮学校の副校長先生に相談に行った。(実際行ってみると、顔の肖像画はほとんどなくなっていた) 副校長先生は、「北朝鮮に対する質問も遠慮なくしてください。生徒達がそれぞれ自分の思いを語りますので…」とうことだった。

交流会に乗り気でない生徒達

クラスの生徒は交流会に乗り気でなかった。交流会の日が近づくにつれてだんだん重い雰囲気がでてきた。そして当日。「行たくない」やら「バイトがある」やらで、ドタキャンの生徒が2人でした。逃げ帰ろうとする生徒もいて、無理矢理説得して参加させたりした。なぜこんな風になったのか、はじめはその理由が分からなかったが、帰りの車の中で理由を聞いて納得した。「朝鮮学校の子と交流しても面白くなさそうだったから」「何か恐そう」「暗そう」「話題が合わないんじゃないかと思ったから」…そこにあったものは、朝鮮に対する先入観であり偏見であり差別であった。またそれまで学習を積んできたがゆえに生まれる「日本人は嫌われているんじゃないか」という不安であった。

結局クラスからは10人が参加し、朝鮮学校からは生徒会役員5人が参加してくれた。

本当に楽しく盛り上がった交流会

自己紹介の後、2つのグループに分かれて、まず校内を見学させてもらった。生徒会役員の子達が説明してくれた。クラブ活動が本当にすごくて、

生徒達は感激していた。特に民族舞踊はため息ものだった。その後、会議室に戻り、交流した。朝鮮学校の生徒が、朝鮮学校がについて説明。その後生徒達が事前に準備していた質問をした。朝鮮学校の生徒達は、明るくてノリがよく、交流会は常に笑いが絶えない雰囲気、いつの間にか千代田の生徒と朝鮮学校の生徒は一体化していた。時間の経つのも忘れるほどの楽しい交流会で、最後はみんなで朝鮮の歌を歌って締めくくりとなった。生徒達はいつの間にかアドレスの交換もしていた。私は感動していた。日朝の間に横たわる分厚い壁が目の前で溶けていくようで感動していた。新しい時代は必ず創っていくことができると確信した。(11月26日には朝鮮学校の生徒に招待され、3人が文化祭にも参加した)

侵略の事実、差別を肌で感じた生徒達

生徒達は、いろんな質問をした。

- ・ドラマ「東京湾景」を見ていましたか？日本人と結婚することについてどう思いますか？
- ・親はどう言うと思いますか？
- ・キムチは毎日食べますか？
- ・日常生活の中で、日本の文化と何か違うことはありますか？
- ・韓国・朝鮮人なのに、日本で生まれ育っていることについてどう思っていますか？
- ・日本の学校でなく、朝鮮学校を選んだのはどうしてですか？
- ・今まで何か差別を受けたことがありますか？バイトなどで断られたことがありますか？
- ・日本に帰化しようと思うことはありますか？
- ・昔、日本は朝鮮を植民地にしましたが、今の日本人も嫌いですか？
- ・小泉首相の靖国神社の公式参拝についてどう思いますか。小泉さんは嫌い？
- ・「日の丸」「君が代」についてどう思いますか？
- ・韓国や北朝鮮に行ったことはありますか？
- ・北朝鮮の民族舞踊で、小さな子どもたちが踊っているのはやらされているのですか？
- ・金成日氏についてどう思いますか？
- ・北朝鮮の拉致問題についてどう思いますか。金正日の写真を飾っていることについて。

- ・私は北朝鮮の国には「強制がある」と思うんですが、北朝鮮のことをどう思いますか。
- ・おじいちゃん、おばあちゃん（一世）はそれぞれどうやって日本にやって来たのですか？。
- ・日本にして欲しいことは何ですか？
- ・日本と韓国・朝鮮は、これから仲良くなっていけるとおもいますか。

その中で、生徒達がショックを受けたのは次の質問に対する回答だった。

Q おじいちゃん、おばあちゃん（1世）はどうやって日本にやって来たのですか？

・私の父のおじいちゃんは強制連行で日本に連れてこられました。過酷な炭鉱の作業で20時間も働かされていたそうです。辛くておじいちゃんは、3回脱走したらしいけどその度に見つかって、ひどい拷問を受けたって聞きました。

・母方のおじいちゃんは、ひいおじいちゃんが勉強するために日本に渡ってきて日本で生まれました。おばあちゃんは強制連行です。

・おじいちゃんは19才のとき、働くために日本に来ました。母のおじいちゃんは死んでしまいました。おばあちゃんは13歳の時、日本に渡ってきて苦しい生活をしたみたいです。朝鮮に帰りたいたいと思っていたみたいだけど、結局帰れず、お墓は日本にあります。

・おじいちゃんは生活苦で日本にきました。他の国に出稼ぎに言った人は、その後、バラバラになって、そのまま別れてしまうこともあります。

Q 韓国・朝鮮人なのに、日本で生まれ育っていることについてどう思っていますか？

・私はよかったって思っています。私は日本の戦争の生き証人だと思ってます。もし私がいなかったら日本の強制連行の事実が消えていってしまうかもしれないから。

目の前の朝鮮学校の生徒から語られる事実。今まで本に書いてあった強制連行や差別が本当の出来事として迫ってくる瞬間であった。そして、北朝鮮関連のニュースが大きく流れた次の日は周りの人の見る目が違うという話、何人もが駅のホームから突き落とされそうになった話を聞き、生徒達は今も続く差別に心を痛めた。

実際に朝鮮学校の生徒達と交流すること多く生徒の変化するきっかけとなった。

看護婦を目指していたA子は、夏休みのはじめの頃、役員の学習会にも出ず、文化祭ノートも全くせず、ひたすら看護学校の受験勉強をしていた。その垂衣が、激変したのが朝鮮学校との交流であった。A子は「朝鮮学校に行って、朝鮮の人達のイメージが変わった」と自らの中にあった偏見に気付き、「差別とか嫌がらせをする人達は、日本が加害国ってことを知らんのやと思う。今日朝鮮学校に行ってきた余計に教科書にも『従軍慰安婦』や日本の侵略のことを載せて欲しいと思うようになった」と語り、急にこの問題に対する関心が膨らんできた。ハングル辞典を図書室から借りてきて独学まで始めるありさまだった。それから、人が変わったように受験勉強と文化祭の学習を両立させ打ち込むようになった。病院受験の前日さえ、垂衣は文化祭の準備を手伝うことをやめなかった。多くの生徒が、朝鮮学校との交流をきっかけに主体的にかかわるようになった。文化祭を成功させ、日本の過去の過ちと今も続く「在日」差別をもっとたくさんの人に知って欲しいという思いでかかわる生徒が増えていった。

交流をしての特徴的な感想

- ・それまで侵略の学習をしてきた生徒達は「自分達は朝鮮学校の子らに嫌われているじゃないか」という不安を持っていたがゆえに、「日本人が嫌いじゃない」という言葉にほっとし、歓迎されたことに安心した。
- ・テレビ番組の話で盛り上がり、好きなタレントのことで話が弾み、「おなじ高校生なんだ」と実感することで、「自分の中にある朝鮮に対する偏見に気付いた」という生徒がうまれた。
- ・実際に朝鮮学校の生徒達の口から聞く話に、生徒達は「強制連行や差別は本当だった」という実感を持った
- ・差別を受ける朝鮮学校の生徒の話にこころを痛め、「この事実を知ってほしい。知って自分も知って変わったから」と、みんなに知って欲しいと思うようになった生徒が多かった。

朝鮮学校に行って、思ったより全然親しみがある人達でちょっとビックリした。もっと堅くて話をしても笑いとかないかなあって思った。でも、今思ったらそういう風に思ったのも、在日韓国・朝鮮人の人たちを一

歩引いてみちゃってたらかなんかなあって思った。何かそう思っていた自分が嫌な感じ。話してるときも、やっぱりしっかりしているなあって思ったし、日本人から今も差別とか嫌がらせをされているのに、日本も日本人も好きって言うてくれて、何か自分の意思をしっかり持ってるなあって思った。クラブは、朝鮮の伝統を引き継いでいるもの多くて、舞踊部とか、民族楽器とか、歌とか、ホンマにありえへんぐらい上手くて、めっちゃ感動やった。こういう風に日本で生まれて日本で育った朝鮮の人達が、差別を受けていても、祖国の伝統を受け継いで守り続けようとしている姿にうちは何かいろいろ考えさせられた。言葉も普通に一緒に、話しててもめっちゃ楽しかったのに、何かが少しずつどっかが違うように感じて、うちはそれが何かわからんけど、めっちゃ辛かった。今も複雑な感じ。高卒の資格をもらわれへん朝鮮学校に、高い授業料を払ってまで行って、民族の伝統を守り続けて、いろんな差別を乗り越えていかないといけない人達が、同じ年の子とか・・・めっちゃかわいそ。うちがあの子らの立場やったら、絶対日本が嫌になると思う。それやのに、昔の日本人と今の日本人は別って言うてくれて、日本も好きやうて言うてくれてめっちゃ嬉しかった。でもこういう風に思っているにもかかわらず、日本人はまだ差別する人達がたくさんいて、ほんまに早く日本と朝鮮の歴史にあった出来事を知って欲しいと思う。それで一日でも早く日本人と平等な生活ができるようになってもらいたいと思う。今日朝鮮学校に行って、朝鮮の人達のイメージが変わったように思う。みんなめっちゃいい人達でおもしろいし、考え方がすごいしっかりしていて、絶対日本人の人達が思っているイメージとは全く反対と思う。差別とか嫌がらせをする人達は、日本が加害国ってことを知らんのやと思う。今日朝鮮学校に行ってきた余計に教科書にも「従軍慰安婦」や日本の侵略のことを載せて欲しいと思うようになったし、やりすぎたニュースもやめて欲しいとかいろいろ思うようになった。早く日本と韓国・朝鮮が仲良くなれる日が来てほしい！（A子）

私は朝鮮学校に行く日が近づくにつれて不安が大きくなっていくのを感じました。同じ高校生でも自分たちのノリと違って合わなそうと思っていたし、自分たちよりも遥かに堅いイメージがありました。どうして接したらいいのか、楽しく会話できるのか、何か禁句のようなものはあるのか・・・など細かいことをひたすら考えていました。今思うと私の中で「朝鮮」という名があまり印象のいいものではなかったんだと思います。朝鮮学校に着くと、生徒会の顧問の先生はじめ会長や副会長さんが出迎えてくれて、みんな面白くて明るくて本当に普通に普通で私達と何にも変わらない高校生でした。学校を案内してもらいました。クラブ活動がとても盛んで、いろんなクラブを見学さ

せてもらいました。とても印象的だったのは、合唱部です。ホントにスゴイ！のひとことで、とてもきれいだけど力強くもあるあの歌声は今でも覚えています。私は朝鮮学校に行って在日韓国・朝鮮人のおかれている立場の理不尽さを知ったように思います。朝鮮高級学校を三年間通い続けて卒業しても、高卒には値しないということ。どれだけ勉学が優れていても日本の国立大学には行けないということ(大検を受けて合格しないといけない。その大検も中学から朝鮮学校だと受けることができない)。学校におりる私学助成金は日本の学校に降りる額の10分の1ほどに過ぎない・等々。これは紛れもなく在日韓国・朝鮮人に対する差別です。「なぜこんな法律が普通に認められるんだろう。何で私達には何にもできないんだろう」と私は怒りがこみ上げました。北朝鮮で何か事件が起きたニュースが流れた次の日は、嫌がらせがすごくひどいと聞きました。通りすがりの人に「朝鮮帰れ!」と言われたり、駅のホームで後ろから押されたり、チマチョゴリを切られたりなど悪質な嫌がらせをする日本人がいるそうです。私に話してくれた女の子は、日本人の大人から「朝鮮帰れ」と言われたそうです。信じられませんでした。子どもが言うことでも許せないのに、大人が何の罪もない在日の子らにそんな言葉を浴びせるなんて・・・ひどすぎるし悲しすぎる。私達と交流をしたみんなは「差別を差別とも思わない」というたくましい子達でした。でもそう思えるまで、きっといろいろ経験して多くの困難を乗り越えてきたのかな・・・とも感じられました。偏った見方しかできない日本人に負けじと、みんなしっかりと民族に対する誇りを持って生きていました。でも在日韓国・朝鮮人であるみんなは、これから日本社会で生きていく中で今以上に苦労しないとだめなのかな？進学・就職・結婚・・・なんか大変そうなものがまだまだいっぱいある。私は「在日」の人達の苦労や悩みが和らいでいくことを願っています。そのためにも日本が在日韓国・朝鮮の人を大きく受け入れていくべきやと思います。だから、私達がやってる交流とかがとても大切です。一部の大人達が、もう偏見の目を変えることができないなら、私は私達の時代からそんな目を消していきたい。悪いイメージをなくしていきたい。そうすれば未来は、日本人にとっても在日韓国・朝鮮人にとってもきっと明るいものになると思います。そしてこれからを担っていく子ども達に国として「日本の過去」を学ばせていくことが、何よりも大事なルールではないでしょうか。アジアの人もそれを望んでいるのです。お互いの歴史を知った上で、初めてお互いの未来を共に築いていくことができるんだと私はいつも思っています。「こういう交流はホンマすごい嬉しい!!!」っていう朝鮮学校の子らのこの言葉を聞いたとき、私は正直嬉しかったし、「今日は来てよかった!」って思えました。それにこれからもこの朝鮮学校のみんなと繋がっていたいなと

も思いました。最初に感じていた不安はどこに行ったんだろう?というくらい私は朝鮮学校のみんなと打ち解けていました。実際に朝鮮学校へ行き、会話をしたり、いろんな人やものを見て自分で体感することによって、勝手に抱いてしまっていた「朝鮮」への堅い暗いイメージを消すことができました。次は私達の学校へもぜひ招待したいです。本当に行ってよかったです。みんなに会えて話しができて良かったです! (M子)

朝鮮学校に行っているひとは「在日」の中で10分の1もいないっていうのを聞いて、日本の学校に行っている人がそんなに多いんやってビックリした。朝鮮学校に行けない理由に高い授業料のこともあるのかなぁ。朝鮮学校は、「在日」の人達の支援でなんとかまかなっているらしくて、授業料がすごく高いって言っていた。私学助成金は大阪府からはあっても国からはなくて、そのことを聞いて、学校のことから差別をしているんだなぁって思った。日本がした侵略戦争のせいで日本に住まざるを得なくなったのにその人達を支えないなんて、日本は当たり前のこともできてないやんって思った。「在日」の人と結婚して子どもも朝鮮学校に行かせたいって言ってた。やっぱり、民族を大切にするんだなぁって思った。「日本人だから結婚しない」というんじゃないくて朝鮮の人と結婚して子どもも朝鮮学校に生かせたいって考えていて、日本の中でも自分たちの国を大切にしようっていう思いなのかなぁって思った。北朝鮮のことは聞き辛かったけど、「日の丸」「君が代」の強制問題の話になったから、北朝鮮も強制ばいところがあると思ってるんやけど…って言うてみた。みんなはそれは日本の報道が悪いってことだけを言っていて、アメリカに対する憎しみが強くてアメリカに勝つためにみんなで団結してるんだって言ってた。朝鮮学校の先生の話も聞いていても、強制じゃなくてアメリカに対抗するための団結だっていうのが、全部は納得できなかった。おじいちゃんおばあちゃんが、どうして日本に渡って来たのかをそれぞれ聞いたら、一人一人ちゃんと答えてくれて、自分が何でここにいるのかちゃんと子どもに伝えられているんだなぁって思った。李未来(リ・ミク)さんは、おじいちゃん?が強制連行で日本に連れてこられて強制労働させられたらしい。三回脱走して三回とも捕まり、拷問を受けたって言うてた。想像したら今でも涙が出てくるって言ってた。文梨華(ム・リファ)さんはおじいちゃんが仕事を求めて来たらしい。日本にして欲しいことは、やっぱりちゃんと歴史を教えてほしいと言うことだった。「日本語うまいなぁ～」とかよく言われるみたいで、そういう時は「何も知らないんだなぁ」て思うって言ってた。「在日」の人たちにとって日本人が何も知らないことが一番腹が立つことだと思う。何も知らないから差別もでてきてしまうんだと思うし、国が歴史をちゃんと教えることも反省の一つだと思う。朝鮮学校に行って、いっぱい話をし

て、本当に楽しかった。みんな気さくな人だったし、何か失礼なことを言っ
てなかったが心配だけ。メールでまた会おうって言ってくれたりして、新
しい友達ができたみたいで嬉しかった。(Y子)

【4】金メダルのマラソンランナー孫基禎選手から消えた「日の丸」を学んで 省略

【5】関東大震災の朝鮮人虐殺で朝鮮人を救った大川常吉さんを学んで

関東大震災の時に「朝鮮人が火をつけてまわっている!」「朝鮮人が井戸に毒
を流している!」とデマが流され、6600人もの朝鮮人が虐殺された。混乱
の中で社会主義者や朝鮮人が暴動を起こさないように先回りして弾圧を加え
た事件である。民衆による「朝鮮人狩り」がおこなわれている状況の中で、
横浜鶴見の警察署長をしてい大川常吉さん(当時46歳)は、朝鮮人300人を
署内に保護し、押し寄せる群集に「もし自分が井戸水を飲んで異常があったら
朝鮮人を渡そう」と言い、その場で一升もの井戸水を飲み、助けた。

特徴的な意見・感想

・侵略の問題を学ぶ中で生徒の中に大きくなっていった「日本人であるこ
とがイヤになってきた」「こんな勉強ばかりしんどい」という思いを変
えるきっかけになった

最近ずっと日本の朝鮮への加害ということを勉強している。そのせいか日
本という自分の国を知るのが怖いとさえおもえたし、何か日本の過去の汚さ
に嫌気がさしていた。でも大川常吉さんという人物のおかげで私の思いつめ
ていた気持ちが少し軽くなったように思う。大川さんのように朝鮮人を救っ
たとはっきり記録に残っている日本人は少ないと思うけど、他にもきつとい
たと思う。ほとんどの日本人が朝鮮人を見下す中で、洗脳されずに、自分も
朝鮮人も同じ人間だとういう気持ちをしっかり持ってそれを信じて、多くの
人々の偏見から朝鮮人を守ったということが本当に素晴らしく思えた。

韓国の人たちは、大川常吉さんを自分たちのおじいちゃんやおばあちゃん
を守ってくれたありがたい人だと語り継いでいてくれているんだろうなあ。
韓国の人々は感謝している大川豊さんに逆に謝られて、こんなふうに素直に謝
る日本人がいることで日本人全員が、政府と同じように反省のふりをだけし

ている日本政府と同じじゃないんだって思ってくれたかなと思った。私もそういう日本人がいることを知れて嬉しく思った。

「いつ自分が加害の側に立つかわからないという危機感を常に持って相手の痛みを感じ取る感性、想像力をいつも持ちたい」ということを、一人一人が常に考えていくことができたなら、社会が悪い方向にすすもうとしているときにくい止められると思う。大川常吉さんも豊さんも、意見の多い方に流されるんじゃないくて自分で考えることができたからあんな行動をとることができたと思う。

【6】在日韓国・朝鮮人問題を学んで

省略

【7】侵略の事実と向き合い頑張っている人たちの話を聞いて

C Dを創って「慰安婦」や「強制連行」を訴える中田郁江さん

79歳の中田郁江さんは、「慰安婦」のことを広く知ってもらうためにC Dを作ったり、自作の平和新聞(『忘れない通信』)を発行したりされている方である。戦後初めて「従軍慰安婦」のことを知った時、「私とちょうど同じ時に、日本のために朝鮮の女性がこのように扱われていたのか」とショックを受け、自分も何かしなければいけないと思って取り組みを始められた。学校に4度も足を運んでくださり、ホームルームの時間には話もしていただいた。中田さんは、クラス生徒達のとくみを常に励まし続けてくださった。(中田さんは、何と卒業式には、「3年1組のみなさんへ」と「教育基本法のしおり」と『あたらしい憲法のはなし』を生徒一人一人にプレゼントしてくださった。)

「ハーグの会」を作って「慰安婦」をみんなで考える西村千津さん

中田さんと一緒によく活動されている西村さんは、高校時代は幸せな結婚にあこがれ、カワイイ奥さんになろうと思っていた、今のような活動をするとは考えもしなかったそうである。「慰安婦」問題に出会い、千田夏光『従軍慰安婦』を泣きながら読み、普通のおばあさん(元「慰安婦」)が正義を実現するために勇気を出してカミングアウトしたことに励まされ自分が変わっていった。今、友達と「女性国際戦犯法廷ハーグ判決を実現する会」をつくり、「女性国際戦犯法廷」をわかりやすくみんなに伝える活動をされている。そんな自分自身が変わっていく話と、女を性の対象とする見方が変わらない限り戦争での性暴力はなくなるのではないかというジェンダーの視点からの「慰安婦」問

題を、中田さんと一緒にホ - ムルーム語ってくださった。

特徴的な意見・感想

- ・日本の中にこんなふう頑張っている人達がいることに、生徒達は励まされたようだった。
- ・平和の取り組みといっても、具体的にイメージが湧かなかった生徒達だが、身近な所からできるいろんな平和の取り組みがあるんだということを知ることができた。
- ・78 歳のおばあちゃん(中田さん)が、CD を作り平和のために活動されている姿に驚き、感心していた。
- ・高校時代は幸せな結婚にあこがれ、カワイイ奥さんになろうと思っていた西村さんが変わっていく姿に、自分の生き方を重ねて考える生徒もいた。
- ・クラスの生徒達の取り組みに感動し、大きく評価してくださる二人の励ましのメッセージに、生徒達は自分達の取り組みの値打ちがわかり、自信を与えられたようだった。

中田さん、西村さん、台風の影響で日程が変わってしまったのに再度来て頂いて本当にありがとうございました。中田さんのお話を聞いていて、日本が戦争に負け、軍国教育などの政治が間違っていたことに気付かれ、そこから勉強を始められたことを知り、勉強することの大切さを改めて感じました。勉強をしないと知れないし、興味も持てず、知ろうとすることもできないんだと思います。西村さんは、カワイイ奥さんになろうと思っていたけど、結婚してみると忙しくて友達と話すこともなくなっていき、大変なことが多かったと思います。でも「従軍慰安婦」のことを知っているんな活動に参加されるようになった西村さんがとても強く思いました。私は、大きな問題にもぶつからず、平凡に生きれたらいいと思っていました。でもそれではもったいないような気がしました。中田さんや西村さんのように自分に出来る精一杯のことをして生きてるほうがいることを知ると、温かい気持ちになります。この文化祭に向けての勉強で、私は日本が昔にした残酷な侵略戦争の事を知り、それを隠してきた日本のことも知りました。すごくショックなことで、腹の立つこともたくさんありました。でも、その中で中田さんや西村さん、松代大本営を残す為に活動した高校生や、千代田高校のみんなの感想など、日本の加害の部分を知って、被害にあわれた人を支えたり、痛みを少しでも分かろうとしたりする人がこんなにもいることを知ることが出来ました。日

本の中で頑張っている人たちがいることを知り、私がみんなに支えられているような感じがしています。私も勉強をしていくことで、日本人がしないといけないことわ何かを考えたいと思います。文化祭では、「従軍慰安婦」問題や、「在日」問題など、この間、私たちが勉強してきたことを少しでも多くの人に知ってもらうために、展示なども工夫しようと、今頑張っています。私たちに出来る精一杯なものを作り、当日お会い出来るのを楽しみに待っています。(U子)

また、来てなぁ ^o^ 話をきけてヨカッタですッ！！それと、写真ちょーだいや！！！！

じゃあ～またネェ♥ ばいばいキーン
ン・Hちゃん

BYT・C・Yちゃん

先日は、お忙しい中、私たちのために貴重なお話し、ありがとうございました。中田さんの戦時中のお話を聞くことができて、とても良い経験になりました。ずっと軍国教育をうけてきていたのに、日本が戦争に負けて、初めて政治が間違っていると気付かれて、もう一度勉強をしないといけないと思ひ学ばれたってことは、本当にすごいことだと思いました。CDも一度聞かせていただきました。何かすごく胸がつまる感じがしました。詞の中に慰安婦たちの思いが詰まっているような気がしました。戦争はもう二度としてはいけない・・・この思いを私たちが受け継いでいかなければいけないんだと改めて思いました。人が人でなくなってしまう戦争、大切なものをすべて失ってしまう戦争、何の得もない戦争。戦争をこれからもしないために、私たちは、しっかり学んでいかなければいけないと思います。西村さんのお話は、今、文化祭で学んでいる「従軍慰安婦」問題ということで、とても自分の為になりました。私には、行動におこしてこの問題を訴えるという事はできていませんが、西村さんは、自分から行動をおこして、すごいと思いました。千田夏光さんの「従軍慰安婦」という本を読み、もし、この本に出会っていなければ、慰安婦のことを知らずにいたかも知れないと思うと、本当に、すごい出会いだと思いました。日本が、隠してきた残酷な過去を学ぶことは、嫌だけど、けどそれでも、日本人として、最低限学ばないといけないことなんじゃないかなあと思っています。今は、文化祭を通じて、色々な日本の過去を学べてよかったと思っています。中田さん、西村さん、本当にありがとうございました。(N子)

私がお2人に初めてお会いしたのは、京都でした。その時は、あまりお話もできなかったのですが、今回わざわざ千代田高校まで足を運んで下さって、お話をしにきて下さいました。本当に嬉しく思っています。中田さんは、私の祖母と年齢が近いんです。でも、全然違います。中田さんのように、

一生懸命、人のためにつくしている姿を見ると、本当に尊敬してしまいます。あのCD・・・とても多くの思いが詰まっているように感じられました。歌を通じて、慰安婦にされた方々の気持ちが私のもとへ届きました。そして、改めて、恐ろしいな・・・と感じさせられたんです。**西村**さんのお話は、とても私たちと「近い」感じがしました。普通の生活をしていて、ふっと開いた本から西村さんの新たな人生が始まったんだと思います。西村さんの意見とか、疑問など、とても共感できました。ジェンダーのお話も、そうだなってとても考えさせられました。本当に、お2人を尊敬しています。今を生きる私たちにとっては、過去の話です。それを、これからのためにという思いを込めて、必死に活動されています。自分のためだけでなく、人のために何かをできる人って、本当に素晴らしいです。これからも、日本の過ちを、無知な日本人の人に示して行ってほしいと思います。そして、私もお2人を見習って、自分なりにできることを探していきたいと思いました。本当にお話してくださいまして、ありがとうございました。またいつかお会いして、お話したいです。ありがとうございます。(M子)

教育方針が違くと、人間の考え方は大きく変わってしまうんですね。**中田**さんは、戦争で日本が負けるまで、何の疑問も持ってなかった。多分、他の多くの日本人も、日本が戦争することに疑問を持ってなかったんじゃないかと思います。そして多くの日本人は、この戦争の内容をよく知らないかもしれません。でも、中田さんの様に過去の事と終わらせず、CD作ったり、平和新聞を作ったりしているのは、本当に凄い事だと思います。何とかしなければと思って、行動に移せるなんて凄いと思いました。私は学校で、色々教えてもらって慰安婦問題を知ることが出来たけど、**西村**さんは本を読んで、自分から知ろうとした事が本当にすごいと思います。私だったら、本だけ読んでも、こんな事があったんだ、ヒドイなというので終わってしまったかもしれません。文化祭またあと少しですが、まだまだしっかり学びたいと思います。(Y子)

昔から従軍慰安婦があったなんてビックリしたと言うか、何と言ってもいいか分からないけど、従軍慰安婦を知っていく中で、私は、従軍慰安婦は女性にとってはとても苦痛で災難で、男の人にとっては、ストレス発散としか考えていなくて、とてもむごい、悲しいとしかしか思えません。中田さんや西村さんの話などを聞いて、一生懸命頑張って、世の中の人々の助け、救いをされていて、素晴らしい人生、生き方だなんて思いました。CDとかも作ったりして、こんなことでも出来るんだ、やっているんだなって・・・。いろんな工夫をしていて、しかも、世の中の人々で、まだ沢山の従軍慰安婦を知っていない人が、世界中には、多くいると私は思う。もっともっと世界中の人々

に、こんな事があったんだなって知ってもらえるよう、学んでもらえるようになってほしいなと思います。(M子)

C Dがあるなんて初めて知りました。本当に詩が重くて頭に「慰安婦」さんが苦しんでいるのが浮かんできました。ここまでやってもらえて元慰安婦さんも本当に嬉しかったと思う。私だったら、涙が止まらないと思います。西村さんは、自分の出来ることに協力していて、初めて西村さんを見た時、こんな若い人も慰安婦問題に参加していて、びっくりしました。初めは普通の生活をしてたひとがいきなり生活が、ガラッと変わってしまって、ビックリ！！ビックリ！！でもこういう人がもっともっと増えたら絶対世界は変わると思う。平和な方向に進めると思います。心から共感できる人はステキだと思う。(Y K)

こんな風な活動をしてるなんて知らなかった。慰安婦の人たちも、とてもうれしと思う。C Dも、聞いただけでホンマ辛いと思う。(T)

話を聞いて、内容があんまりつかめてなかったんやけど、「慰安婦」問題や、過去の「侵略」の問題に向き合って活動している人がいてるのは、いいことやと思いました。中田さんは、C Dを作ったり、自作の平和新聞を発行したりしているのは、すごいと思った。私やったら、C Dを作って訴える事が出来ないなって思いました。「ハウセンカ」という曲を聴いて、朝鮮の人を傷つけた痛みが私は伝わってきました。「元慰安婦」が正義を実現するため勇気を出して訴える姿に勇気をもらい、いろんな活動に参加している西村さんも、すごいなって思いました。もっと、世界中に知ってもらいたいです。(T子)

中田さんや西村さんの話を聞いて、C Dを作ったり、従軍慰安婦の人たちのために、何かやっていることは凄いことだなと思いました。それに、多くの人に講演したり、話したりして、多くの人に聞いてもらおうとすることも凄いなと思いました。それに知らなかった事や、中田さんや西村さんのやっている事とかが分かって、よかったと思いました。(C子)

昨日、中田さんと西村さんの話を聞いて、とても勉強になった。今までは、ビデオとかプリントとかでしか「慰安婦」の事を勉強しなかったけど、中田さんと西村さんが「慰安婦」の事を直接教えてくれて、改めて「慰安婦」の人達が、かわいそうになったし、日本政府に対して、とても怒りが沸いてきた。私は「慰安婦」の人たちに対して、出来ることは何もないけど、中田さんや西村さん達には、頑張ってもらいたい。これからも「慰安婦」の人達の為に活動してほしい。(A K)

そんな風に日本人の人が、新聞を作ったり、国際法廷を開いたりしてるのがすごいと思った。めっちゃ偉いと思った。昨日は、そういう活動をしてい

る人たちの話を聞くことができてよかった。西村さんとか若いのに、すごいなと思った。家庭の事情とか詳しく話してくれてよかった。西村さんの家の内容がよくわかった。(E子)

【8】全国の高校生の取り組みに学ぼう

- ・朝鮮人強制連行を掘り起こした倉敷中央の高校生
- ・高校松代大本営を保存した篠ノ井旭の高校生

特徴的な意見・感想

- ・歴史を掘り起こし歴史の事実と向き合う倉敷中央や篠ノ井旭の高校生に「あっ、自分らの文化祭と同じような取り組みしてる」と、共感していた。
- ・高校性が歴史を動かしている姿を知り、自分達よりももっと頑張っている高校生がいるのだ……と励まされ、刺激されたい。
- ・「高校生がこういう勉強をすることが珍しいことじゃなくなるようになればいいなって思った。文化祭はこういう勉強をすることがダサイことじゃないと思えるひとが増えればいいと思う」と、学ぶ意味を考えるきっかけになった。

朝鮮人の強制労働を調べた倉敷の生徒の言葉に引き寄せられる感じがした。「このことを少しでも多くの人に知ってもらいたい」って。「あっ、自分らの文化祭と同じような取り組みしてる～」って思ったらなんか、いろんなことを共感できそうな気がした

知ってしまった責任、今を生きる私たちができること、すべきこと、きちんとこの篠ノ井旭高校の子たちはやり遂げたんちゃうかなって思える。ただ何も始めようとしてないだけで、高校生って、ほんまは大人以上に大きな力を持っていたりするんかもな。

篠ノ井旭高校の子らは素晴らしいことをやり遂げた。テスト勉強して、いい点とるより、何十倍も達成感や充実感みたいなものがあつたんと違うかな。そして、身をもって感じたと思う。テストの成績なんかより、もっと大切なこと知らなければならないことがあるってことを。「自分たちも、やればできる！」ってことを。

高校生の取り組む姿勢、頑張りを見て、地元の人らも心動かされたんじゃないかな。こういう連鎖っていいよね。多くの人と共感し合えるって素晴らしいと思った。

高校生とか子どもが本当の歴史を知ることがすごく大切だと思った。篠ノ井旭高校の人たちが松代大本営を残そうとしてなかったら、今は残っていない

いかかもしれない。倉敷中央高校の人たちが在日韓国朝鮮の人と話をすることで、日本人でも日本の加害について知ろうとしている人がいることを知って少し心が軽くなった人もいてくれたと思う。

高校生がこういう勉強をすることが珍しいことじゃなくなるようになればいいなって思った。文化祭はこういう勉強をすることがダサイことじゃないと思えるひとが増えればいいと思う

過去は消すことができないし、変えることもできない。それぞれの国の過去によい面、悪い面がある。でも、その消せない過去があるからこそ、みんなは新しく未来をつくっていかうとするし、明るく平和な未来を望んで、目指すんじゃないかな。

学校に行ってる期間にテストのために必死に勉強するだけではもったいないなって思う。篠ノ井旭高校や千代田高校でしているこういう勉強ができる高校生は、テストのためにだけ勉強している高校生より、日本の加害の部分を知ったりして、ちょっと苦労は多いかもしれないけど、たくさんの人の辛さや頑張りが知れて、優しい人になれそうな気がした。

10「学んだことを伝えたい」 本気になった「慰安所」マップとジオラマ作り 学んだことを表現させたい

文化祭実行委員のM子は、「自分たちにできることは、まず歴史の事実をきちんと知ること、文化祭で見に来てくれた人に日本の侵略のことや『従軍慰安婦』のことを少しでも多くの人に知ってもらう事ではないか」と文化祭ノートの感想に書いていた。そんな思いを実現すべく、展示の模造紙の他に生徒達が創意工夫して学んだことを表現できるものはないだろうかと考え、私は「慰安所マップ」作りと「ナヌムの家」の資料館の写真をもとに「慰安所ジオラマ」作りを提案してみた。文化祭実行委員のM子とY子は「作るって、いったいどうやって作ったらいいの?何か大変そう…」とあまり乗り気ではない様子。しかしA子の「やるやる!おもしろそうやん!」という勢いに押され作ることになった。

教室に「慰安所」を再現することは、「ナヌムの家」の「慰安所」を再現をめぐっての話し合いの経緯から提案したいと思った。「ナヌムの家」では、資料館をつくる時、「慰安所」を再現することに際して話し合いが持たれていた。「あまりに生々しすぎて耐えることができない」…「歴史の事実を伝えるためにつらい思いを乗り越えて展示しよう」……。結局、元「慰安婦」の方々は後者を選んだ。私はこのことを知り生徒に提案したいと思った。

自分達の力で完成させる

役員が中心となり、10 日前から作り始めた。ところがいったん作り始めると、どんどん真剣になってきて止まらなくなってきた。「できるだけ本物そっくりにするにはどうしたらいいんだろう？壁は？天井は？ベッドは？ベニヤの加工は？中を薄暗くするには？」と・・・悪戦苦闘しながら英知を結集し、連日 8 時まで 6 ～ 7 人が残り文化祭前日完成させた！担任はもっと簡単なものかと考えていたが、生徒のやる気がそれを許さなかった。生徒達は、自分達で相談しながら、仕事の段取り、役割分担、作業をほぼ完璧にこなしていった(すごいと思った！) 生徒達は、みんなで知恵を出し合うことでここまでできるのだということを実感した。

文化祭当日、何人も展示の前で泣いていた

文化祭当日、クラスの取り組みが新聞にも紹介され(「朝日」「赤旗」)、沢山の人が展示を見に来てくれた。そして、何人もの方が展示の前で立ちすくんで泣いておられた。中田さん、西村さんも来てくださり、感動の涙を流されていた。その姿を見て生徒達は、感激していた。「慰安婦」にされ無念のうちに亡くなっていった女性達の思い、これから日本が背負っていかねばならない、忘れてはいけない過去、今も続く「在日」差別・・・自分たちの思いが、まわりに一歩広がったことを生徒達は確信していた。

「夏休みから続いたクラスの学習会も終わり、いよいよ文化祭に向けての準備が始まりました。担任が提案した内容から、私たち役員がどんどん大きくしていったしまった展示。高校生活、最後の文化祭ということで今までにないものを作ろうと“前代未聞”を密かに目指していました。アジアで慰安所があった所を示す「慰安所マップ」を作り、「慰安所」を再現するということになりました。私たちが学んできた「慰安所」は決して楽しめる場所ではありません。そこは恐ろしく、多くの少女たちの人権が奪われ、人生を奪われた場所です。何か少し気が引ける感じも実際ありました。でも・・・「ショックを受けて欲しい。」この想いが大きかったです。私たちが学んできた重い過去の事実をすべて受けとめてほしいと思う気持ちもあったけれど、私は 3 年 1 組を見に来てくださった人たちに、「慰安所」のジオラマをみて重い衝撃を受けて欲しかったんです」(M子)

「私達のしていることが本当に大事なことなんだって感じる。展示を見て『ありがとう』って言ってくれる人もいた。私達がこの問題を勉強することを『ありがとう』って感じてくれる人がいることにビック

りしたし、やっぱりそう言ってもらえると嬉しかった。もっと学ばなくちゃという気持ちになった」(Y子)

11 いろんな取材を受けるなかで

マスコミなどの取材は自分たちの取り組みの社会的な意味を知る機会になる
新聞の取材

文化祭前日、「朝日」と「赤旗」の取材を受けた。生徒達は別段緊張もせず、楽しくそうに、イキイキと記者さんの質問に答えていた。質問に答えることは、生徒達にとって学んだ内容を振り返り確かなものにする機会となった。

「女たちの戦争と平和資料館」の取材

文化祭に来ていただいた京都のオリーブの会の西村千津さんを介して、12月にVAWW-NET 日本の西野瑠美子さんの取材や「女たちの戦争と平和資料館」設立準備委員会の方々の取材を受けた。生徒達は、読んできた本の著者の西野瑠美子さんに会えて感激していた。西野さんは、気さくだけれど、正義感と瑞々しい感性が溢れるいかにも自立した女性ジャーナリストって感じのカッコよさがあって生徒達は惹かれていた。西野さんからはジェンダーの観点から戦時の「性暴力」についてのお話も聞くことができた。

生徒達が作った「慰安所マップ」は8/1に東京の高田馬場にオープンする「女たちの戦争と平和資料館」に「慰安婦」問題に取り組んだ高校生の記録として展示されることになった

生徒達はこの中で、自分たちの取り組みの社会的な意味を感じ取っていったように思う。マスコミに取り上げてもらうことは、自分たちの取り組みの社会的な意味を知る有効な機会になると思う。

12 文化祭を終えて文化祭実行委員の2人の変化

【取り組みを通してのM子の成長】

M子については、実は文化祭3日前にエピソードがあった。文化祭で取り

組んでいる「侵略」の問題で、父親、祖父とぶつかったのである。M子の父親は大企業の管理職で体制的な考え方の方であった。いろんなものごとを知っている父は、M子にとっては偉大な存在であった。文化祭の3日前の夕食時、M子は親と口論になった。「在日」の選挙権問題から強制連行の話になり、「強制連行なんてなかったんやぞ。朝鮮は日本の国やってんから、朝鮮人が日本のために働くのは当たり前やないか」と父親が言い、M子がこれまで学んできた「慰安婦」のことを説明しだすと、「何年前のことをむしかえしてるねん」と言われ、そこにおじいちゃんも入ってきて2対1でバトることになり、M子は最後に泣き出してしまったという。次の日、M子は1ページにわたってその悔しい気持ちをノートにびっしりと書いてきた。「一番軽蔑する意見を持つ人が、自分の一番身近な所にいたことがショックやった。でもちゃんと説明できなかった自分が悔しい」と。しかしこの出来事は、その後彼女が親から思想的に自立する大きなきっかけとなっていたように思う。

7月、文化祭の学習と受験勉強の間で揺れ、「歴史は好きじゃなかった」と語っていたM子は、「高校生活をテストのためだけの勉強で終わらせてしまうのはもったいない。私にはまだまだ知らなければならないことがたくさんあるから」と語った。そしてこの文化祭で「私は知ることの大切さと知らないことの恐ろしさを知ったように思う。すべてのことが複雑にかかわって、原因を知ることの大切さを考えさせられた」と感想に書いてきた。

大奮闘で文化祭を成功させた文化祭実行委員の2人は、代休を使って文化祭を終えての感想を文化祭ノートにびっしりと書いてきた。

文化祭を終えてのM子の感想

「忙しかったなあ…。」これが文化祭を終えて、まず私が感じた事でした。私の谷山クラス3年1組は「日本の侵略」について調べました。「日本の侵略」と聞いて、日本人は何を思うでしょうか。私の場合、何にも思いませんでした。というより、“意味が分らない”という表現の方が正しいのかもしれません。特に私ぐらいの年代であれば、このように感じる日本人が多いのではないかと思います。日本の侵略は授業で少しかすった程度であまり関心が無かったような気がします。2年の文化祭で沖縄について学び“知る事の大切さ”を覚えたはずだったけれど、そんな熱い気持ちはその時の私の中では消えかかっています

た。私は卒業後の進路の事で悩みもあり、自分が何を最優先させるべきなのか、どの道を選べば自分がベストでいられるのか、自分自身を見失っていた時期でもありました。将来の事を考えたら過去を知る事が大切だとは思えなかったし、戦争時代の話なんて興味が湧かなくて、そういうのは年寄りの話題だと……。今思うと恥ずかしい限りです。私は“無知”だったのです。韓流ブームに乗っかっているだけの自分が情けなくなりました。日本の過去はそんな私をどんどん悲しい気持ちにさせていきました。特にショックが大きかったのは「従軍慰安婦」と呼ばれていた女性たちの存在でした。字に書いてある通り「軍に従い慰める女」という意味です。でも決してその女性たちは自ら軍兵たちの慰み者になったわけではありません。日本軍の侵略地での強姦を防ぐためにとアジアの各地から強制的に連行されたり、お金が稼げるよと騙されたりして大事な体をまるで物のように使われていったのです。“強姦を防ぐため”という聞こえが良すぎるかもしれません。当時、侵略地での強姦によって性病にかかる兵士が多くいました。性病は一度かかると治りにくく、日本の戦力低下が心配されました。その結果、「慰安所」が設けられたのです。他にも軍兵たちの訓練のストレス発散の場だとか、軍の上官に絶対服従させるためだとかいう理由があった事も知りました。私は、これは男尊女卑の現れだと思います。でも、どんな理由を並べようとも女性の「性」だけを目的にして、このような扱いをするなんて許されるわけがありません。同じ女性という立場から考えると、言葉で言い表せないような恐怖と怒りが込み上げました。それが当たり前のように行われていた時代が日本にあった事にもショックを受けました。これらの過去を知り「日本」という国を見つめ直した時、日本は明らかに加害者側に立つべき国だという事に気付きました。そして、これらの問題をクラスの役員で学習会をしながらお互いの意見や感想を出し合いました。それぞれの感想を聞いて「ああ、同じやなあ。」と感じる事がいっぱいあったし、自分とは違う視点から見た感想も聞くことができました。みんなで取り組めたことがお互いに支えあえたのではないかと思います。一人では背負いきれないような過去の事実を、みんなで知って感じていく事で怒りや悲しみなど多くの感情を共有できました。

クラス役員のみんで文化祭のためにいろいろな場所を訪れました。鶴橋のコリアタウン、京都の立命館大学・国際平和ミュージアム、東大阪の朝鮮高級学校など、多くの人々と触れ合いました。コリアタウンでは文さん夫さんからお話を伺い、朝鮮高級学校では同い年の7人の生徒のみんなと先生からお話を伺いました。実際に足を運ぶ事で異文化に触れる事ができ、在日韓国・朝鮮人の人々から直にお話を聞くことで、その人たちの複雑な思いが強く激しく伝わってきました。知らぬ間に自分の中に築かれていたステレオタイプ。「在日韓国・朝鮮人は私たちと“同じ”ではないっぽい。頭が固そう。少し恐そう。」これら

も実際に交流することで打ち破る事ができたと思います。京都の国際平和ミュージアムでは戦争展が開かれていて、私は友達と担任の3人で西野留美子さんという女性の方の講演を聞くことができました。西野さんは弱者の女性を救うための組織「VAWW NET JAPAN」(バウネットジャパン)に加入されていて、日本人によって「慰安婦」をさせられていた人々と共に日本政府に個人補償を求める運動をされています。この西野さんのお話から今でも昔の記憶のために苦しんでいる女性が多くおられる事や、韓国の民族意識の高さによって「慰安婦」だったと訴える事ができずに一人苦しんでいる女性がおられる事も知ったのです。そして日本政府の対応が個人補償を拒むばかりで何も解決していない現実も知りました。千代田高校にわざわざ出向いてくださった方たちもいました。中田郁江さん通称おばちゃんと西村千津さん、長野県から宮下与兵衛さん、弁護士の小林保夫さん、在日韓国人のリャンさんです。中田さんと西村さんとは前に京都の西野留美子さんの講演会でお会いしていました。このお二人も「慰安婦」問題で活動されていて、中田さんは80近い年齢であるにもかかわらず年を感じさせない元気なおばちゃん、『従軍慰安婦』の想いを歌にしたCD作りの参加者でもあります。「慰安婦」の存在を知った時、私と同じぐらいの年齢の女性たちが少女時代にそんな目にあっていたなんて...と何か申し訳ないような何とも言えない気持ちになって、彼女たちのために何かをしたいと思ったんです。」と目頭を熱くして語ってくださった中田さんを見て私は胸が熱くなりました。西村さんはかわいい奥さんをして幸せな家庭を築く事だけを望んできたけれど、現実はいまうまくいかなかったといいます。そんな時、ふっと従軍慰安婦の本を見つけ何気なしに読んだのが始まりだったそうです。泣きながらその本を読み「従軍慰安婦」問題に興味を持たれたそうです。そして「自分にも何かできれば...」と思い、自分のできる範囲でいろんなボランティアに参加されています。自分の人生観も変わったとおっしゃっていました。宮下さんは長野県の松代大本営の保存を進めた篠ノ井旭高校の生徒のみなさんのお話をしてくださいました。その話を聞いて、高校生でもやろうと思えば何でもできるのかもしれない、高校生だからこそできることがあるのかもしれないと思いました。小林弁護士は自分の父が日本兵として侵略戦争に関わっていた事や、今行われている裁判の状況などをお話してくださいました。そしてリャンさんは韓国料理のビビンバの調理実習に参加してくださったんです。食後に辛い過去の話や日本にいても韓国人としての誇りを持っていることなどを語ってくださって、その後は楽しく会話もできてとても楽しかったです。今こうやって振り返ると本当にいろんな人と触れ合ってきたんだなぁと感じます。そしてお会いしたみなさんから多くの事を学び吸収しました。本当にみなさんには感謝の気持ちでいっぱいです。

夏休みから続いたクラスの学習会も終わり、いよいよ文化祭に向けての準備が始まりました。担任が提案した内容から、私たち役員がどんどん大きくしていった展示。高校生活、最後の文化祭ということで今までにないものを作ろうと“前代未聞”を密かに目指していました。アジアで慰安所があった所を示す「慰安所マップ」を作り、「慰安所」を再現するということになりました。私たちが学んできた「慰安所」は決して楽しめる場所ではありません。そこは恐ろしく、多くの少女たちの人権が奪われ、人生を奪われた場所です。何か少し気が引ける感じも実際ありました。でも・・・

「ショックを受けて欲しい。」

この想いが大きかったです。私たちが学んできた重い過去の事実をすべて受けとめてほしいと思う気持ちもあったけれど、私は3年1組を見に来てくださった人たちに、「慰安所」のジオラマをみて重い衝撃を受けて欲しかったんです。こんな所で、日本人がどんな悲惨な事をしてきたのか...と。友達は、こういう事実を隠し続けてきたのも日本なんだという事も知って欲しいと言っていました。その通りだと思います。私たちがなぜ今まで原爆の被害者とばかり思っていたのか、なぜ自分の国の加害の過去を知らなかったのか。私たちは隠されてきたのです。「教える必要はない」という一部の大人たちの勝手な判断によって、絶対に学ばなければならない事を隠されてきたのです。その結果、傷つく人々がいました。一番身近な在日韓国・朝鮮の人々です。無知な日本人によって今までどれほどの人たちが傷つけられてきたのかと思うと、言い表せないような申し訳なさと同じ日本国民が無知ゆえにしてしまった行動への恥じらいの気持ちでいっぱいになります。でも、私も今回このテーマを勉強しなかったら無知なままでした。もしかしたら私も韓国人というだけで蔑視していたかもしれない・・・と思うと少し怖かったです。

マップやジオラマができていくに連れて、“作っていている”という実感が湧いていきました。慰安所とはにかくリアルに再現しようと壁は木製にと決めて、管理部のオッチャンに買ってきたベニヤ板を切ってもらい、やすりをかけ、スプレーで古めかしく色付けして1枚1枚貼っていきました。ベッドはどうするか？シーツは？布団は？といろいろ試行錯誤を繰り返し、慰安所が出来上がったのは文化祭前夜でした。全面を暗幕で覆っていたので中にはほとんど光がなく、なんとも重い空気でした。「できてしまった。」という思いが一番にきました。そして一人でも多くの人にこれを見て欲しいと強く思いました。文化祭2日目。いよいよ本番という感じでドキドキしながら見に来てくださった人たちの反応を窺いました。すると、涙を流しながら感想を書いている女性を見つけました。今年の夏にナヌムの家に行ってお話をされたそうで、その時の重い内容が慰安所のジオラマを見た瞬間、衝撃と共によみ返ってきた

と泣いておられました。そして泣きながら「よくここまで頑張ったね。この教室を“慰安婦”にされた人たちに見せてあげたい。」と私たちを褒めてくださったんです。私は涙が出そうになりました。中田さんも西村さんも来てくださっていました。中田さんは私の手を取り涙ながらに「感動しました！すごいです！いやぁ・・・ほんとに・・・」と言葉を詰まらせながら言うてくださって、西村さんは「すごいねえ。西野留美子さんに写真撮って送ります！」と言ってくださいました。私は教室に居る時間が短かったので、このぐらいいいかみなさんの反応というのは見る事ができなかったのですが、私たちの展示を見て涙を流してくれている事に何だか胸がいっぱいになりました。担任もいろんな先生から嬉しい感想を聞いたらしく、「こんな文化祭は初めてや！」と喜んでくれました。私は「作ってよかった！」と心の底から思いました。役員みんなで苦労しつつマップやジオラマを一緒に作り上げていったということも、それらを見てショックを受けて何かを感じてくれた人がいたという事も、すべてに感動しました。私の学びの文化祭もとうとう終わりました。1年の時は「何なんこれ文化祭?!」とやる気のかけらもなかった私が、今では「やってよかった。」と、達成感と充実感に浸っています。私は“知る事の大切さ”を知ると同時に“知らない事の恐ろしさ”も知りました。“在日いじめ”も何も知らない、無知である人がいるから起こるのだと思います。でも、「無知だから」という理由で許されるわけありません。だから、伝えていかなければいけないのではないのでしょうか。日本の過去を、加害の事実を、隠していくのではなく教えていき、そして平和な未来を築いていくことができるのではないかと私は思います。韓国人を始め、アジアの人々もそれを望んでいるのです。今、日本では激しい韓流ブームが巻き起こっていますが、ハマってしまっている人々はこれらの日本の過去を知っているのでしょうか。もし何も知らないのなら、その日韓間は悲しい事に完全なる上辺だけの付き合いに過ぎません。今は良くてこのブームが去ってしまった時、残るものは何だろうと考えると私は複雑な気持ちになります。このブームをきっかけに日本人が知識を広げるという事はないのでしょうか。私たちが加害の事実や被害者の立場、存在を知る事で救われる人が大勢いるかもしれませぬ。何も行動できなくても“知る事”でそれは一歩前進なのです。今を生きる私たちにできる事は、事実を知る事。二度と同じ過ちを繰り返さない事。そして少しでも早くアジアの国々と真の友好を結ぶ事ではないのでしょうか。私はこれを常に胸に留めて、これからも多くの事を学んで知識を広げていこうと思います。

私の最後の文化祭テーマ。『日本の侵略』 日本の過去、加害の事実を知っていくことは、容易なことではありませんでした。感情的な私は慰安婦問題を知り本当に腹が立って気持ちを抑えるのが困難だった事も幾度とありました。「自

分の国が・・・」とショックで気持ちが重くなって知る事を拒みそうになった事もありました。それでも役員みんなと最後まで頑張れて良かったと思っています。朝早く来て、夜遅く帰るという日もあったし、眠くて体がだるくて、どうしようもない日もありました。役員の中には受験を間近に控えながらも「最後の文化祭、一緒に作り上げたい！」と頑張ってくれた子もいます。クラスみんなでは装飾に取り組む事もできました。そんな私たちの頑張りが2社の新聞に載り、多くの人に私たちの声を伝える事ができたと思います。そして忘れてはならないのが私たち生徒と一緒に頑張ってくれた担任である全を始めとする他の教科の先生たちでした。雑用と呼ばれるような事も私たちのために引き受けてくれて、「みんな頑張ってるから先生も頑張ったろっ！」とか言って夜遅くまで付き合ってくれた先生もいました。そんな言葉が私はとても嬉しかったし、一緒に頑張ってくれている先生たちの姿に逆に元気をもらった気がします。全もいろいろ忙しい中、私たち役員のブーイングを受けつつも手を抜かず頑張ってくれてありがとう。いっぱい怒ってゴメンね。私たちのために頑張っている全の姿がすごく嬉しかったよ。今までの文化祭の中で今回が一番、私にとって生徒と教師が一体となって共に作り上げる事ができた文化祭だったと感じています。本当に忙しい毎日だったけれど文化祭に全力で取り組めてよかったと思いました。

千代田高校の文化祭は日頃の疲れを癒すための“息抜きの場”ではなく、この時だからこそいつも以上の力を発揮できる“頑張れる場”だと改めて感じました。そしてそこから新たに始まることが多くあります。私は後輩のみんなにもそれを知ってもらいたいです。だから、千代田高校ならではのこの文化祭と一度きちんと向き合ってほしいと思います。私は千代田の文化祭に参加することができて嬉しいです。長かったようで短かった3ヶ月間、みんなで学びみんなで作り上げたこの文化祭を私はずっと忘れません。3年1組のために携わってくださった多くの人たちに『ありがとう。』と感謝の気持ちを贈りたいです。最後の文化祭を最高の文化祭にすることができて本当に嬉しいです！みんなありがとう！！

【取り組みを通してのY子の成長】

もう一人の文化祭実行委員のY子は、とにかく、すべてにおいてやるべき課題をきっちりとやりあげた。文化祭ノートの感想は常に2～3ページ書いてきた。それも、まず1時間かけて大体の下書きをし、さらに2時間かけてじっくりと考えて清書した。毎回本当によく考えていたと思う。それが自分の中に積み上げられていき、途中からはそれまでに学んだことを生かして考えたり、反論したりできるようになっていった。漫画家Kへの反論や大臣の

発言への反論も鋭かった。そんなY子だが、文化祭の途中まで私はもっとこのテーマにハマッて欲しいと思っていた。しかしそれも終盤にかけてだんだん主体的になっていき、最後の方は、自ら図書室で西野瑠美子さんの『若者達の戦争責任』を借りて来て読んでいたりした。

この文化祭の中で、彼女にとって大きかったのは中田郁江さんや西村千津さん、西野留美子さんたちとの出会だった。Y子の家は、裕福ではない。Y子は将来保育士になりたいという夢を持っていたが、2年の時は、親に「短大に進学したい」という気持ちを切り出せず、毎日悩んで言うまでに1ヶ月もかかったという生徒である。そんなY子は、2年生の時、沖縄のことを学習して「思いやり」予算を知ったことがきっかけとなって変わり始めた。彼女は、米兵1人あたり約1500万円もの税金が使われている事実を知り、苦しさの根源が今の政治のあり方に関係していることに気付きはじめた。「お父さんは朝8時から鉄工所で働き、お母さんはパートに行っている。こんなに一生懸命働いているのに私の家は貧しい。以前は貧乏が恥ずかしいことだと思っていたけど、その原因が今の政治に関係があるということがわかってきて、そうじゃないと思うようになった」といい、クラスの誰よりも、今の政治を変えたいと思うようになっていった。そんなY子が、平和運動で頑張っている中田さんや西村さん、西野さんたちの姿に触れ、このように言った。「この文化祭で侵略の事実と向き合って頑張っているひとがたくさんいることがわかった。いろんな人に出会って、おっきいことはできないけれど、小さいことから始める勇気を私はもらったような気がする。」「今までは平凡な人生でいいと思っていたけど、何かもったいない気がする。私も平和をつくる一人でありたい」…彼女はこの文化祭で自分の生き方を問うようになっていったと思う。彼女は、千代田短大に進学し、千代田短大九条の会にも入り、毎月9のつく日(9・19・29)の河内長野駅頭での署名行動に短大の友達と参加している。

13文化祭後のかわり

文化最後も中田さん西村さんに支えられる

文化最後も中田郁江さん、西村千津さんとのかわりは続いた。卒業式前の2月には、中田さんから、「笠木透さんの歌を生徒さんに聞かせてあげたい」と、笠木さんに連絡をとりコンサートをセッティングしてくださった。2月2日、その卒業コンサートに、有志約50名が参加し、笠木さんの到着を待った。しかし、何とその日、豪雪が降り、恵那からこちらに向かう途中、笠木さんを乗せた車は高速道路の途中で動かなくなり、楽しみにしていたコン

サートは残念ながら中止となってしまった。

また、卒業式を1週間前に控えた2月中旬、中田郁江さんから「卒業する3年1組のみなさんへ」と『あたらしい憲法のはなし』と『教育基本法のしおり』が送られてきた。卒業式当日。私は教室で、その送られてきた『あたらしい憲法のはなし』と『教育基本法のしおり』を一人一人の卒業証書の上に乘せ、生徒達に手渡した。中田さんは、卒業式にも参加してくださった。

2月 2日 卒業コンサート「笠木透コンサート」
有志50名が待機 しかし雪で中止(残念!)

2月24日 中田さんが卒業式へ参加
『あたらしい憲法のはなし』と『教育基本法のしおり』をいただく。
卒業証書と一緒に生徒に渡す

朝鮮学校の文化祭に招待される

11月28日、朝鮮学校の文化祭に招待されて、M子、A子、AM子の3人が参加した。再会に感激。チョゴリのファッションショーはため息ものだった。

京都社会フォーラムに西野瑠美子さんの公演を聞きに行く

12月12日、文化祭でクラスに話に来てくださった京都の「オリーブの会」の西村千津さんの紹介で、京都大学で開かれた京都社会フォーラムに参加し「NHK番組改変問題」の分科会で西野瑠美子さんの公演を聴いた。

NHK番組改正問題で朝日新聞に激励の手紙を送る

1月中旬、NHK番組改変問題が起こった。「従軍慰安婦」について扱った5年前の番組、『問われる戦時性暴力』が政治家の圧力で改変された事件で、西野瑠美子さんのVAWW-NET ジャパンやそれをスクープした朝日新聞が攻撃されるという事態が起った。秋の文化祭で西野瑠美子さんから直接この問題を聞いて知っていた生徒達は、関心を持って推移を見守っていた。そんな時、校長室にクラスの文化祭実行委員の真季と裕美と私が呼ばれ、校長から「朝日新聞を励ますメッセージを送ってみたいらどうや」と提案された。「なら教室に取材に来てくれた朝日新聞の記者の人に送ろう」ということになり、次の日、Y子、M子、A子、AM子の4人が、あ～でもないこ～でもないと意見を出し合いながら夜9時までかかって手紙を完成させた。

14 ショッキングな出来事

文化祭 3 日後、漫画家 K の『戦争論』を読んで生徒が混乱

文化祭の展示を完成させるために連日夜 9 時まで学校に残って頑張り、完成させた展示を誇らしく語っていた N 子が、文化祭の 3 日後、漫画家 K の『戦争論』を読んで完全に混乱してしまったというショッキングな出来事があった。

彼女の家は「朝鮮嫌い」で、もともと朝鮮に対して偏見のある家庭だった。聞くとところによると、戦時中に朝鮮半島で事業をしていたおじいさんが、敗戦時に財産を没収され、この時からおじいさんの朝鮮人に対する深い憎しみが始まったらしく、それは彼女の母親にも伝承されていった。さらに近年の拉致問題がそれに拍車をかけ、「朝鮮人は汚い事をする連中」というのが当たり前の家庭環境の中で彼女は育ってきた。当然、彼女はその影響を大きく受け、文化祭のはじめの頃はそのたぐいのことをよく言っていた。しかし、夏休みから始まった文化祭の学習や朝鮮高級学校との交流が、N 子の中にあるそんな偏見を少しずつ溶かしていったように思う。(でないとなんか一生懸命文化祭には取り組めないと思う)

文化祭の準備の最終段階。彼女が「日本の中国侵略」の資料として模造紙に貼って使う写真を、図書室の「侵略」写真集から選んでコピーしていた時のこと。ちょうどコピー機の近くに若手教師がいて会話となり、教師は奈月に「その本の写真の中には合成写真があって、日本がいかにかひどいことをしたかって思わせるために中国が合成したらしい」「南京大虐殺の犠牲者の数もいろいろあってどれが本当かよくわからない面がある……」と言った。奈月は「え～、それホンマなん??」と驚き、会話は続き、「それなら小林よしのりの『戦争論』を一回読んでみる?」となって、N 子は文化祭後にその教師から『戦争論』借りることになった。

10 月 2 日、展示の完成。役員を中心に生徒達は、模造紙に「慰安婦」問題や日本の侵略の説明を書き、「慰安婦」マップを作成し、教室の一角に「慰安所」のジオラマを再現させ、見に来た何人もの方が展示を前に涙をこらえ切れなくなるような感動的なもの完成させた。

そのわずか 2 日後の話である!

「どっちが正しいか、自分で確かめてみたら……」と渡された『戦争論』を N 子は家に持って帰った。教師は、3 ヶ月かけて学習を積み上げてきたのだから、『戦争論』も批判的に読めるだろうと判断したらしい。N 子は『戦争論』を一晩で読み上げて来て、次の日、私にこう言いつた。「なぁ先生……

文化祭でやったことってホンマやったん・・・？」「うちにホンマのこと教えてた？？」「なんか何がホンマかわかんようになってきたわ・・・」と。さらに「『慰安婦』ってホンマに無理矢理やったん？外に出て散歩してたらしいやん」「1日にホンマに40人も相手できるんかなあ？」「20万人ってホンマにいっぺんに20万も人を殺せる？？」・・・といろいろいろいろ言ってきた。私はびっくりして一つ一つ反論したが、全くとりつくしまがなかった。私は、「これらは『存在したのか、存在しなかったのか』と説が半々に分かれていて論争されているような問題ではなく、歴史研究の中ではすでに結論がでている問題で(だから教科書にも載せられてきた)、それを『ウソだ』『存在しなかったんだ』というのは、戦争を肯定しようとする人たちが特定の意図を持って歴史を解釈しようとしていること」・・・など、1時間以上にわたってN子と話をしたが、N子に大きな変化はなかった。彼女は「何がホンマかわかんようになった」と言い、何を言っても入り口でシャットアウトという感じだった。「3ヶ月にわたる学習の結末がこれなのか・・・」と、私は悔しくて情けなくて、言葉では言い表わせないほどの絶望感を味わった。と同時に、3ヶ月にもわたってあれだけ一生懸命学んできたものを、わずか一晩で覆してしまう『戦争論』の影響力のすさまじさに打ちのめされた気持ちになった。もし、N子が「慰安婦」問題を中心に書かれた『新G宣言3』だけを読んだとしたならば、恐らくあんなに大きく動揺はしなかっただろう。逆に女性蔑視の考え方を許せないと思っているN子は批判的に読むことが出来たかもしれない。しかし、「学校で侵略問題を学ぶこと＝左翼教師の洗脳」という切り口で、自分の知らない事柄の宣伝が次々に出してくる『戦争論』を前にしては、彼女は不信感ばかりを増幅させられ、私の反論も洗脳のように思うしかなかったのだと思う。

おわりに 「侵略」の問題を学ぶ難しさ、今回の取り組みの弱さについて

【1】侵略の学習の苦しさはどう向き合うのか

「侵略」の事実を学んでいくことは、生徒達にとってとても苦しいものである(生徒だけでなく私達にとっても)。「従軍慰安婦」の学習では、「資料を読みながら逃げ出したいような思いに駆られることがある」とつぶやく生徒もいた。しかし、今回、たくさんの生徒がこの問題を最後までしっかりと学ぶことができた。

それはなぜだったのか。生徒はこう語っている。

「日本が侵略戦争をして、たくさんの人を傷つけたことを勉強する

のはやっぱり嫌だった。同じ日本人が話すのも嫌なくらいのことをしてしまったり、人体実験とか虐殺とか信じられないようなことをしてしまってた。でも、中田さんや西村さん達みたいな人の存在を知り、今自分が勉強していることは大切なことなんやって思うことができて、この問題を勉強することが嫌にならずに続けられた」

(Y子)

すなわち生徒達は、一緒に学ぶ仲間がいたから、そして侵略の事実ときちんと向き合い世の中を変えようと頑張っている人達がたくさんいることを知れたから、学び続けることができたと言っている。平和学習において生徒達に冷厳な事実を向き合わせる時、人間の温かさや素晴らしさ、歴史を前に進めようとしている人達のを努力を学習の中にしっかり組み込んでいくことが重要であることに気付かされる。それを今回ほど強く感じたことはなかった。

【2】「人道的に許されない」から「戦争犯罪」の認識へ

3ヶ月間学んできたN子が、一夜にしてなぜあんな風に変われたのか？文化祭3日後の『戦争論』を読んだN子が変わった出来事は、私にとってはこの上なくショッキングな出来事であった。3ヶ月間学んできたN子が、なぜ一夜にしてあんな風に変われたのだろうか？

この出来事を振り返ってみる時、その理由の一つとして、彼女が育ってきたアジア蔑視の環境が影響していることは間違いないだろう。しかし他方で、この出来事の中に、文化祭での私の指導の不十分さ＝私の課題が含まれているように思のである。すなわち、平和国際教育研究会の森田俊男先生からも指摘をいただいたように、私には日本軍「慰安婦」の問題を<国際法違反＝戦争犯罪>という視点で学び取らせていく点が大きく欠けていたのである。国際法に全く触れなかったというわけではないが、侵略の事実を学ぶ時、日本の過ちを戦争犯罪であったと生徒に認識させていくという視点が、私には欠落していたと思う。

だから、生徒達は「慰安婦」問題を「人道的に許されない問題」として学び、「日本軍は、人として許されないことをした」「日本政府は、国として許されないことをした」と理解していったように思う。もしここに国際法の観点があれば、生徒達の「慰安婦」問題に対する理解は「戦争犯罪」としてより深いものになっていったのではないか。さらに、それにとどまらず、解決に向けて日本政府が取るべき方策も、国際社会の流れに沿う方向

でより鮮明になっていったのではないか。生徒が学べるように書かれた資料を探すのは難しいかもしれないが、教師である私の中にそのような観点があつたならば、生徒の認識はもう一步変わっていたと思う。もしかすると奈月の今回の動揺は起こらなかったかも知れない。

このレポートをまとめながらそのことに気付き、今さらだけれど後悔している。学習の途中で触れた「女性国際戦犯法廷」の判決が、まさにこの観点からおこなわれていたからなおさらである。

ではどのような国際法に違反した戦争犯罪だったのか？

ではいったい、どのような国際法に違反する戦争犯罪なのか。残念ながら、私には詳しく説明できない。しかし日本軍「慰安婦」が、当時の国際法に照らしても違反している戦争犯罪であったことは紛れもない事実である。

ハーグ条約（1907）

- ・ 占領下の市民の保護の義務
- ・ 違反行為には賠償責任を負う

国際連盟

- ・ 奴隷禁止法
- ・ 女性・児童売春禁止法

また戦後補償と被害者の名誉回復の問題にかかわっては次のような国際法の流れがある。

国連「戦争犯罪および人道に対する罪に対する時効不適用条約」（1968）

戦争犯罪者に時効はないという規定

国連人権委員会「ファン・ボーベン国連最終報告書」（1993）

「制度化された強姦」の「被害者の原状回復、賠償および更正を求める権利」

国連人権委員会「クマラスワミ特別報告」（1996）

「日本政府に法的責任があり、真相解明、謝罪、補償、責任者の処罰が必要」

国連「マクドゥー - ガル特別報告」（1998）

性奴隷は「人道に対する罪である。補償と責任者の処罰が必要」

国連「戦時下の女性の暴行・性奴隷の責任を追及する決議」（2002 年）

過去の責任についてもふさわしい清算（公的謝罪、補償、責任者の法的追及）

以上の国際法の流れをふまえ、森田先生は、戦後補償の問題を国会の不作为の問題として捉えてさせていく必要があると提起されている。すなわち戦後、立法で個人の被害者への謝罪と補償をする法をつくってこなかった国の責任を生徒達に考えさせ、その法律をつくっていくことが自分達の課題だと捉えられるようにしていくことが大切だと指摘されている。新しい法律を作って補償を始めたドイツのように。また、今も続く戦争での女性への性暴力を防ぎ、被害者への賠償と名誉回復をおこなうための国際法作りをすすめていくためには、過去の日本の「慰安婦」問題の解決が避けて通れない問題だととらえること。すなわち、生徒達に、自分達が「慰安婦」問題の解決を日本政府に迫らなければならないのは、今の戦争での女性への性暴力をくい止めるためなんだと捉えさせていく観点が必要であると提起されている。

以下、先の問題意識にそって生徒達の感想を振り返ってみる。

例えば、漫画家のKに対して

以下は、Kの意見についての生徒の感想である。文化祭の学習の中では、Kの原文は読んでいない。しかし西野瑠美子さんの『従軍慰安婦のはなし 十代のあなたへのメッセージ』の中から『新ゴーマニズム宣言3』の内容について考え、次のような感想の柱を立て、役員会議で意見を出し合った。

< 感想の柱 >

『新G宣言3』を書いている漫画家のK氏は男子高校生などに人気があり、若者に大変大きな影響力を与えている人物です。K氏の意見についてあなたはどのように思いますか。K氏は、「慰安婦は売春婦だ」「戦場の無秩序を秩序に変えた感謝すべき人々だ(戦場のレイプを減らす大切な役割を果たした)」「日本兵は祖国(日本)のために命をかけて戦っていた人達だ。祖国のため、子孫のために戦った男たちの性欲を許せ」

と言っています。

生徒の感想の一部である。

今まで勉強してきて元「慰安婦」の人たちの気持ちが、私なりにすごく伝わってきた。だからKさんの意見には賛成できない。「慰安婦」の人たちの事を売春婦と断言するのは本当に腹が立つ。私も深く学んでいて、やっと「慰安婦」の人たちの置かれている立場が少しずつわかってきて、こういう事を言えるようになったけど、Kさんは「慰安婦」の人たちの過去をきちんと学んで、事を書いたんだろうか。私だったら絶対書けない。「『慰安婦』は戦場でのレイプを減らす大切な役割を果たした」とか言ってるけど、「慰安婦」の人たちがされたことはレイプじゃないのか！

漫画家、Kさんの言う事は、私には理解出来ません。「認められる売春婦はいるのだ」と言う言葉に驚かされました。「認められる?!」いたい誰が認めるんだ!っていうのが正直な気持ちです。女性たちは無理矢理連れて行かれ、男たちの相手をさせられたのに、そんなの許されるわけがないです。

この時、N子もKの女性蔑視の上に築かれた日本軍「慰安婦」肯定論には批判的な意見を述べていた。クラスの中には、「慰安婦」問題をジェンダーと結びつけ、単に戦争だからこの問題が起こったというのではなく、もともとあった男女差別の社会の上に戦争が起こった時にそれが「慰安婦」という形になって現れた。だから、男女差別をなくしないと限り戦争での性暴力は決してなくならないという鋭い意見を持ったものもいたが、戦争犯罪、国際法違反という観点はない。

例えば、元「慰安婦」の要求について

韓国「ナヌムの家」の元「慰安婦」は日本政府に次のような要求を出している。

日本政府は「従軍慰安婦」として強制連行した事実を認めること
この事実を公式に謝罪すること
蛮行の全貌を明らかにすること

犠牲者たちのために慰霊碑を建てること
生存者と遺族らに賠償をすること
このような過ちが繰り返されないために歴史教育においてこの事実を教えること

文化祭では、上の元日本軍「慰安婦」の日本政府に対する6つの要求を取り上げて考えた。しかしそれらはあくまで「ナヌムの家」の元「慰安婦」の一要求としてであったが、実は、この要求は、国際的な流れの中で出てきたものだったのである。1993年に国連人権委員会「ファン・ボーベン国連最終報告書」の「制度化された強姦」の「被害者の原状回復、賠償および更正を求める権利」として6点を示している。

奪われた人間としての名誉・自由などの回復
失った収入、リハビリの費用などの十分な補償
事実の検証と真実の全面公開
責任ある人物・企業を裁判にかけること
亡き被害者を追悼すること
教育のカリキュラムと教材に事実を正確に記述すること

しかし私は最近までこのことを全く知らなかった。もし私の中に、先の元「慰安婦」の要求が国際的な流れの中で出てきた6要求だという捉えができていて、それらが国際的な到達に立った当然の要求なのだという捉えができていたなら、生徒の認識はもう一歩深まったものになっていたのではないかと思う。

例えば大臣・政治家の発言に対して

また、日本の大臣・政治家の発言について考えさせた時に生徒が述べた次のような感想も、内容が変わってくると思う。

TS衆議院議員にはあきれてしまいました。確かに、自分には関係のない昔の出来事だという意見は、わからなくはありません。私も、ずっとそう思ってたから。でも、私は、日本がやってきたことを知ったとき、なんか、すごく悲しかった。自分の国が・・・?みたいな。何かスゴクショックを受けた。この人はそうは思わなかったんかなあ。知った後も、ショックはなかったんかなあ。この人は冷たい。「反省なんかしてませんし...」って、はっきりと言ったけど、今の私たちにできることは、加害国

として、やるべきことって考えていく必要があるように思います。

S N大臣の「従軍慰安婦は売春業者がやったこと。その業者も殆どが韓国や中国の人」っていう意見は最低だなんて思う。日本が侵略戦争をしてたくさんの人を傷つけたのに、その国の人たちを悪者にして、自分の国を守ろうとしてるみたいだ。自分のおじいちゃん、おばあちゃんが苦労して苦労して生きてきたのは日本のせいなのに、逆に日本に悪者にされてるなんて許せないと思う。

いろんな人に支えられ「戻っていた」N子

10月に大きく揺れたN子の「揺れ」は、その後「戻って」いった。結局、Kについても批判的に考えるようになり卒業していった。彼女が変化することが出来たのはなぜか。一つには、文化祭で学んだことに揺るがぬ確信を持っていた友達の存在があったからであり、もう一つは、文化祭が終わってからも私達とつながり、援助を続けてくださった奈良平和委員会の中田郁江さんや京都「オリーブの会」の西村千津さん、そして VAWW-NET ジャパンの西野瑠美子さんやたちの存在があったからだと思う。中田さんも西野さんも文化祭が終わっても生徒達にメッセージを送り続けてくださった(今も)。時には教室にまで来て話をしてくださったのだ。(さらにもう一つ、担任である私とN子の間に信頼関係が存在したことも大きいと思う) N子は、その後幼児教育の道を志して千代田短期大学に進学した。そして新しい学生生活への適応に悩みながらも、毎月の9のつく日(9日、19日、29日)に河内長野駅頭で取り組んでいる「河内長野九条の会」の署名活動に、他の卒業生と時々参加してくれるようになった。

戦争犯罪の観点、国際法の観点を持って平和教育をおこなっていくことの重要性。私は、今回の文化祭での生徒達の姿と重ねて合わせることでそれを深く理解した。📖 (第36回大分県府全私研レポート)